

平成 20 年度
福祉医療機構 助成金事業

谷間の支援を障害者と地域の人でつくる事業
(平成 20 年 4 月 1 日から平成 21 年 3 月 31 日まで)

報 告 書

社会福祉法人 拓く

目次

1. はじめに	2
(1) 事業概要	2
(2) 事業推進委員会	2
(3) 事前調査	4
2. 事業の目的および方向性	6
(1) 目的 『新しいコミュニティをつくり、支えあう』	6
(2) 方向性 『新しい地域コミュニティづくりの視点』	6
3. 事業の実施内容	7
(1) 異領域とのコラボレーション	7
(2) 保護者のための自立と共生プログラムの開発	11
(3) 地域の支えあいの場の創出	14
(4) 当事者が主体となりつながる	15
(5) 最終報告会の実施	18
4. おわりに	21
(1) 成果	21
(2) 成果物	21
(3) 今後の課題	22
5. 資料	23
(1) 事業推進委員名簿	23
(2) 第3回 事業推進委員会（シンポジウム）	25
(3) デートDV フォーラム	29
(4) 働く男女のエンパワメント・カフェ	30
(5) 保護者のための自立と共生プログラム開発委員名簿	36
(6) 保護者のための自立と共生プログラムの内容	37
(7) 保護者のための自立と共生プログラム試行のアンケート結果	41
(8) AKATSUKI の紹介	47
(9) ピア・サポート研修会報告書	48
(10) 最終報告会の配布資料	53
(11) 最終報告会のアンケート結果	68
(12) 事業推進委員ネットワークの活用	72
(13) 新しいコミュニティづくり	74

1. はじめに

福岡県久留米市では、社会福祉法人 拓く（以下、当法人）が事務局として「障害があるからこそ、この町にしたい」というテーマで、平成 16 年度より、障害当事者、福祉、教育、医療、市民と広く実行委員を募り、1000 人規模のフォーラム（フォーラム in くるめ）を開催しており、閉塞的で、かつ、ストレスの多い日本社会の方向性を共に考える場として大きな役割を果たしている。当法人の事業は、障害者が地域で当たり前で暮らせる地域の実現に向けて活動している。また、平成 18 年度より厚生労働省の助成金事業に申請し、精神障害の地域支援推進のプロジェクトにも取り組んだ。それらの事業を通じて、障害当事者との協働の活動から信頼関係を築き、当事者と地域の人のお互いの「エンパワメント」や共存のあり方を見出し、これからの日本の地域福祉の進むべき道を示唆するものであったと考える。

障害者福祉サービスが充実してきた一方で、自殺、虐待、ホームレスなどの問題（以下、谷間の問題）を抱え、制度の谷間の人への支援が行き渡っていない現状がある。国の対策も手探りで、始まったばかりで、深刻な社会問題となっている。そこで、当法人では、今まで培ってきた経験、及び行政機関や障害当事者との連携関係がある土壌を生かし、制度の谷間の課題解決にチャレンジすることとした。

(1) 事業概要

日本は、超少子高齢社会にあり、認知症や介護が必要な人など支える人が今後益々急増することは厚生労働省の試算でも明らかである。それに加え、経済の成長とグローバル化にともなう労働環境や子育て環境などの社会構造の変化する中で、人と人の関わりが分断され、コミュニティや共同体の意識が薄らぎ、一人ひとりが孤立を抱えやすい生活環境がある。その背景のもと谷間の問題を抱え支援を必要とする人は増加の一途をたどっている。その数の多さからして、一部の専門家・支援者や一定時間の点や線の制度（公的サービス）だけでは対応しきれなくなっているのは明らかである。

また、谷間の問題に共通する孤立や生きづらさを抱えているのは、同じ社会背景、コミュニティの上で生活を営んでいる子育てをしている人、働いている人、高齢者も同じで、実は、国民にとって地続きに一緒の問題である。

そこで、本事業では、谷間の問題に対して、孤立や生きづらさの要因である社会背景（子育て環境、労働環境）や薄らいでいる地域コミュニティに着目し「新しい支えあいをつくる」という方向性を描くことを目的とした。

(2) 事業推進委会

本事業では、事業推進委員会を設置し、多面的な視野、意見を取り入れながら事業を推進した。事業推進委員には、厚生労働省および久留米を中心とした行政機関、身体障害者・精神障害・引きこもりの当事者、支援団体、ボランティアグループ、NPO 法人、児童民生委員など様々な領域で活動している方に参画していただいた（資料「5. (1) 事業推進委員名簿」を参照）。事業推進委員会では、テーマ討議やシンポジウムを通して「新しいコミュニティづくり」について様々な角度から議論し、共通理解を図りながら事業を推進した。事業推進委員会の実績については表 1-1、実施内容については表 1-2 に示す。

表 1-1 事業推進委員会の実績

項目	実績
期 間	2008年4月～2009年3月
回 数	3回
延べ人数	135人

表 1-2 事業推進委員会の実施内容

【第1回 事業推進委会】

日 付	平成20年6月27日（金） 18:00～20:00
場 所	久留米市役所 305号室
参加者	推進委員 42人 事務局員 9人 その他 13人
内 容	1. 事務局挨拶 2. 事業推進委員の紹介 3. 事業内容の説明（事務局からプレゼンテーション） 4. 事務連絡 5. 委員会参加者の意見交換（意見を出し合う）

【第2回 事業推進委会】

日 付	平成20年9月8日（月） 18:00～21:00
場 所	久留米市役所 301号
参加者	推進委員 31人 事務局員 7人 その他 15人
内 容	1. 事務局挨拶 2. 事業の説明および各事業の報告 （1）自立共生プログラム （2）エンパワメント・カフェ （3）異領域とのコラボレーション ①ホームレス支援団体＋（精神障害者、福祉関係者） ②国際交流団体＋（精神障害者、福祉関係者） ③虐待防止団体＋（精神障害者、中高生、教育・福祉関係者） （4）引きこもり支援 （5）ピア・スペシャリスト研修 （6）コミュニティづくりの試行 4. 拓くが考える「新しいコミュニティづくりのあり方」の説明 5. 「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書から」 中村 美安子（厚生労働省） 6. テーマ討論「コミュニティづくりに何が必要か・何をすべきか」 推進委員の意見交換を行った。 7. 事務連絡

【第3回 事業推進委会】

日 付	平成20年12月15日（月） 18:00～20:20
場 所	久留米市役所 401号室
参加者	推進委員 25人 事務局員 9人 その他 18人
内 容	1. 事業進捗報告 2. ビデオ鑑賞「住民の力を生かすコミュニティづくり」 3. ミニシンポジウム①

	<p>テーマ： 「住民は力を持っている」</p> <p>司会： 古川 克介（地域活動支援センター フロンティア）</p> <p>パネリスト： 井手 信（学校法人聖マリア学院 学院長） 漆原 数弥（久留米市社会福祉協議会） 木村 真彦（NPO 法人 久留米越冬活動の会） 井上 謙介（久留米市市民部市民活動振興室 コミュニティ推進）</p> <p>4. ミニシンポジウム②</p> <p>テーマ： 「支援を必要とする人がつないでくれるコミュニティ」</p> <p>司会： 丸林 敏幸（障害者地域生活支援センター ピアくるめ）</p> <p>パネリスト： 徳永 龍一（NPO 法人福祉会 すまいる） 富田 伸（富田医院 院長） 野嶋 さよえ（久留米地域市民ボランティアの会） 笠島 達也（西日本新聞社 大牟田支局）</p> <p>5. 今後の事業スケジュール</p> <p>※ シンポジウムの詳細な内容は「5. (2) 第3回 事業推進委員会（シンポジウム）」を参照</p>
--	---



(3) 事前調査

まず、久留米における引きこもり、児童虐待、自殺、ホームレスなど制度の谷間で支援を必要としている人が置かれている状況や問題・課題を調査した。調査は、久留米市を中心に支援活動している行政機関、支援団体、ボランティアグループ、NPO 法人等に聞き取り調査を行った。調査対象団体の一覧を表 1-3 に示す。

表 1-3 調査対象団体の一覧

#	調査対象
1	越冬の会（ホームレス支援団体）
2	社会福祉士協会 菊池氏
3	社会福祉協議会

4	楠の会（引きこもり親の会）
5	こころの大樹（引きこもり支援団体）
6	久留米大学（児童福祉擁護分野の研究者）
7	久留米市役所 保健予防課 精神保健チーム
8	男女平等推進センター
9	富田医院（精神科クリニック）
10	にじいろ CAP（子どもの虐待防止プログラム実践）
11	西日本新聞 久留米支局
13	ファミリーサポートセンター
14	若者自立塾（引きこもり就労支援団体）

事前調査の結果から以下のことが明らかになった。

① 制度の谷間にいる人たちに共通するのは「生きづらさ」「孤立」である

谷間の問題を抱える人、障害者、地域の人が共通で抱える生きづらさは、自然環境や貧困などの問題よりも、コミュニティ、共同体が無くなり、仲間や他者との関係性が失われ、そこで感じる疎外感や孤立感が大きな要因である。

② 専門家や支援者は少なく、対応できなくなっている

谷間の問題を抱える人たちは、久留米市でも年々増加しており、限りある制度や一部の専門家・支援者だけでは対応できなくなっている。

③ 問題が一部の人だけの問題に留まっている

地域のほとんどの人は無関心で、谷間の問題は一部の当事者、家族、専門家、支援者に留まっている。みんなの問題となっていない状況下で当事者や家族は孤立しており、地域に出ることができない状態にある。また、専門家・支援者は、自分たちの活動で精一杯で他と協働するまでに至っておらず、支援の輪が広がっていない。

2. 事業の目的および方向性

事前調査の結果を鑑みて本事業の目的および方向性を設定した。

(1) 目的『新しいコミュニティをつくり、支えあう』

事前調査前は、谷間の問題を抱え支援を必要とする人たちに対して、その本人のニーズを調査し、制度にないものは創出し、制度につなげようと考えていた。しかし、事前調査の結果から、支援が必要とする人が急増する中で、制度や一部の支援者・専門家だけでは支えることができないことが明らかになった。そこで、本事業では、これらの問題に対して、孤立や生きづらさの要因である社会背景（子育て環境、労働環境）や薄らいでいる地域コミュニティを見直し、地域が本来持っている支援力を強化するような「新しいコミュニティをつくり、支えあう」ことによって制度では支えきれない谷間の支援を必要とする人や、制度横断的支援を必要とする人たちに対して支援が届く支援を、障害者や地域の人達と一っしょに考え、つくり出す事とした。

(2) 方向性『新しい地域コミュニティづくりの視点』

新しいコミュニティをつくるにあたり4つの視点を中心に事業を展開した。

① 世代、文化、障害の有無の違いを受け入れる

地域には様々な世代、文化、障害の有無など違いに溢れており、地域コミュニティ（人間関係）をつくるためには、まずは違いを認めることが必要である。「違いがあるからこそリスクやトラブル、わずらわしさがあるのは当然で、そのリスクやトラブル、わずらわしさがあるからこそコミュニティをつくることができる」と、とらえなおし、あえてつながっていかうという意識が必要だという視点。

② 支えられる側と考えられている人たちが支える側にもなる

高齢者、障害者、生きづらさを抱えている人（経験した人）の苦悩や偏見を体験し、そこから得た生き方は、同じような境遇の人たちを支えることができることもある。そのように、支える側と支えられる側の一方的な関係ではなく、支えあう・お互い様の相互関係をつくる必要があるという視点。

③ 高齢者、障害者、問題を抱えた子どもが地域の人をつなぐ

地域の課題解決のための連携は様々な人がつながるチャンスであり、地域の課題だと考えられている人が新しいコミュニティづくりの基点になり得るという視点。

④ 地域住民は力を持っている

地域住民は本来支えあえる力を持っており、その力を見出し、強化するようなコミュニティ作りのあり方が必要であり、手の届く身近な支えあいは、地域の住民にしかできない、という視点。

3. 事業の実施内容

新しいコミュニティづくりのため4視点を中心に以下の事業を展開した。

(1) 異領域とのコラボレーション

本事業では、実際に谷間の支援をしている団体や個人の実践に焦点を当てるだけでなく、そうした団体や個人に異領域の団体や実践と交わる出会いをつくり、コラボレーション（協力、協調、協働）する機会をつくった。谷間の問題は、一つの分野で自己完結するのではなく、異分野の実践とつながる事で、これまでになかった新しいコミュニティづくりにつながった。

1) ホームレス支援団体+(精神障害者、福祉事業所)

ホームレス支援団体（久留米越冬活動の会）が定期的に行っている公園での炊き出し、テント設営、訪問活動や定例会議に精神障害者や福祉事業者が参加した。参加した精神障害者は、ホームレス支援の場で「支援する」という役割が出来たことでエンパワメントされ、今では本事業とは独立して自主的にホームレス支援の活動に参加している。

ホームレス支援団体とのコラボレーションの実績については表 3-1 に示す。

表 3-1 ホームレス支援団体とのコラボレーションの実績

項目	実績
関連団体	・ 久留米越冬活動の会 ・ 精神障害当事者 ・ 社会福祉法人 拓く
期 間	2008年4月～2009年2月（10ヶ月）
回 数	40回
延べ人数	103人
詳 細	・ 定例会議 9回 … 14人 ・ 自立支援部会議 3回 … 5人 ・ 炊き出し（毎週火曜日） 25回 … 78人 ・ 訪問活動 3回 … 6人



2) 虐待防止団体＋(精神障害者、中高生、教育関係者)

男女平等推進センターと当法人が「交際相手からの暴力（デートDV）防止啓発プログラム研究発表会」を共催した。研究発表会には、虐待防止団体の関係者だけでなく精神障害者、中高生や教育関係者に呼びかけ様々な立場の方に参加していただき、多面的な視点からプログラムを検証することができた。

虐待防止団体とのコラボレーションの実績については表 3-2 に示す。

表 3-2 虐待防止団体とのコラボレーションの実績

項目	実績
関連団体	<ul style="list-style-type: none"> ・ 男女平等推進センター ・ 社会福祉法人 拓く ・ チームさくらんぼ ・ NO!SH くるめ ・ えばの会
日 時	平成 20 年 10 月 5 日（日） 9:30～16:00
会 場	え～るピア久留米 210・211 号室
延べ人数	99 人
プログラム 内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 <ol style="list-style-type: none"> (1) 挨拶と趣旨説明、及び協力団体、生徒達への紹介 (2) 事務連絡（撮影の許可） 2. 各団体から、プログラム発表 <ul style="list-style-type: none"> ・ チームさくらんぼ ・ NO!SH くるめ ・ えばの会 3. グループに分かれての意見交換 <ol style="list-style-type: none"> (1) デートDVとはどういうことか (2) デートDVの本質・要因は何か (3) どうすれば若年層にデートDVの問題の核心である「ジェンダー（社会的性別）を伝えられるプログラムになるか

	<p>4. 全体での意見交換</p> <p>人権侵害により様々な形で孤立しているマイノリティーの立場に追い込まれている人々の状況を暴力とジェンダーの視点から問いなおし、新しい「コミュニティ」の構築に向けて、あり方を検討した。</p>
--	--



3) 働く男女のエンパワメント・カフェ

久留米市男女平等推進センター、NPO 法人 ル・バトーと当法人が連携し「働く男女のエンパワメント・カフェ」を共催した。エンパワメント・カフェでは様々な世代や職種の人たちに参加を呼びかけ、労働環境や働くことについて語りあう場を創出することができた。議論を深めていく中で、「働きづらさ」、社会に適應しない、社会へ参画しにくい「生きづらさ」につながる「引きこもり」や「虐待」や「ニート」の問題にも広げ、これらの問題は自分たちにとって、地続きの問題であること、そして、協同して解決の糸口を模索する方向で議論した。

働く男女のエンパワメント・カフェの実績については表 3-3、実施内容については表 3-4、チラシについては資料「5. (4) 働く男女のエンパワメント・カフェ」に示す。

表 3-3 働く男女のエンパワメント・カフェの実績

項目	実績
関連団体	<ul style="list-style-type: none"> ・ 男女平等推進センター ・ NPO 法人 ル・バトー ・ 社会福祉法人 拓く
期 間	平成 20 年 5 月～平成 21 年 2 月
回 数	全 6 回
延べ人数	224 人

表 3-4 働く男女のエンパワメント・カフェの実施内容

第 1 回 働くってなんだ～労働環境チェック～

日 付	平成 20 年 5 月 23 日 (金) 19 : 00～21 : 00
場 所	え～るピア 201・211 号

参加者	26人（男性9人、女性17人）
内容	<p>ワークショップ（6グループ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いつから、何の為に働いていますか（お金・自己実現など）。 ・ 自分の働き方にモデル（父・母・先生・友人）がありますか。 ・ 現在の状況（職場・社会）の中で働きづらさを感じますか。 ・ 自分の理想の働き方とはどんなものか。実現するためには。

第2回 単身家庭(だけじゃない!)の労働問題～子育て・介護は誰がする?～

日付	平成20年7月25日（金） 19:00～21:00
場所	え～るピア 201・211号
参加者	35人（男性14人、女性21人）
内容	<p>精神障害当事者の体験談の講話「うつ病を乗り越えて」</p> <p>ワークショップ（5グループ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体験談を聞いて感じたことはありますか。働くことが困難に感じたことはありますか。 ・ 働きやすい環境とはなにか。

第3回 若年層(ロストジェネレーション)の就労問題

日付	平成20年10月17日（金） 19:00～21:00
場所	え～るピア 201・211号
参加者	96人（男性33人・女性63人）
内容	<p>ミニシンポジウム・グループ討議（12グループ）</p> <p>テーマ： 若年層の就労問題について</p> <p>進行： 倉知 延章（九州産業大学国際文化学部臨床心理科教授）</p> <p>パネリスト： 岡野 智晃（厚生労働省） 碓井 伸介（若者自立支援塾 塾長） 磯田 重行（精神障害当事者） 阿部 桂三（引きこもり当事者）</p>

第4回 久留米の労働環境について～パネラーによるディスカッション～

日付	平成20年11月28日（金） 19:00～21:00
場所	え～るピア 201・211号
参加者	25人（男性8人・女性17人）
内容	<p>ミニシンポジウム・グループ討議（2グループ）</p> <p>テーマ： 久留米の労働環境について</p> <p>パネリスト： 山口 氏（ハローワーク久留米）</p>

	中村 公彦（障害者自立訓練サポートセンター わーよか） 楢原 弘明（派遣社員・派遣会社勤務体験者） 福田 優子（コミュニティ・ビジネス実践者）
--	---

第5回 経営者の視点『働くこと』を考える

日付	平成21年1月23日（金） 19：00～21：00
場所	え～るピア
参加者	20人（男性8人・女性12人）
内容	ミニシンポジウム・グループ討議（2グループ） テーマ： 久留米の労働環境について パネリスト： 平林 克朗（平林建設株式会社） 佐藤 有里子（株式会社キャリア・リード）

第6回 他国と比べる労働環境～ドイツやデンマーク、オランダなどの取り組み～

日付	平成21年2月27日（金） 19：00～21：00
場所	え～るピア
参加者	22人（男性9人・女性13人）
内容	ミニシンポジウム・グループ討議（2グループ） テーマ： 他国と比べる労働環境～ドイツやデンマーク、オランダなどの取り組み～ パネリスト： 吉岡 マサヨ（ファミリーサポートセンターくるめ 代表） 武本 久美子



(2) 保護者のための自立と共生プログラムの開発

子育てに地域コミュニティの必要性を啓発するためのツールとして、「保護者のための自立と共生のプログラム」を開発した。プログラム開発に当たっては次世代育成や孤立しない子育ての環境を共に考えるために、様々な立場・子育て中の親などプログラム開発委員会（資料「5. (5) 保護者のための自立と共

生プログラム開発委員名簿」を参照)を組織し、プログラム開発委員会において検証を重ねた。また、久留米市の保育園、幼稚園でプログラムを試行し、プログラムのニーズと有効性を確認した。

保護者のための自立と共生のプログラムの開発の実績については表 3-5 に示す。

表 3-5 保護者のための自立と共生プログラム開発の実績

項目	実績
期 間	平成 20 年 7 月～平成 21 年 2 月
回 数	全 7 回
延べ人数	108 人

1) プログラム開発委員会の開催

プログラム開発委員会は全 3 回開催した。プログラムの開発委員会の実施内容を表 3-6 に示す。

表 3-6 プログラムの開発委員会の実施内容

第 1 回 プログラム開発委員会

日 付	平成 20 年 7 月 10 日 (木) 19 : 00～21 : 40
場 所	ポレポレ 2F
参加者	14 人
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム開発委員の自己紹介 ・子育てにおける問題と課題について出し合う ・プログラムに必要な項目を検討

第 2 回 プログラム開発委員会

日 付	平成 20 年 7 月 24 日 (木) 19 : 00～22 : 00
場 所	ポレポレ 2F
参加者	15 人
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・前回会議での決定事項の確認 ・プログラム案の検討 <ul style="list-style-type: none"> - プログラムの説明 (重永氏) - 意見交換

第 3 回 プログラム開発委員会

日 付	平成 20 年 8 月 7 日 (木) 19 : 00～22 : 00
場 所	ポレポレ 2F
参加者	15 人
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・開発委員内でプログラム案を試行



2) プログラムの概要

プログラムは、少人数のグループに分かれ、体験型のワークショップ形式を採用する。プログラムの概要は表 3-7 に示す。また、プログラム内容の詳細は資料「5. (6) 保護者のための自立と共生プログラムの内容」に示す。

表 3-7 プログラムの概要

対象者	就学前の子どもを持つ保護者
参加者数	15～25 人（2 回連続参加を原則とする）
プログラム時間	100 分×2 日間
実施者	ファシリテーター養成を受講した者（※別途受講する必要あり）
プログラムの目的	<ul style="list-style-type: none"> 子どもを育む「地域」の一員として親自身が「地域」に積極的に関わることの大切さを認識する。 子どもの問題解決能力を育むには、小さい頃から様々な地域の大人と関わることの必要性を認識する。 「人と関わる」ということは「違いを理解しあうこと」でもある。そのためコミュニケーション力をつける大切さを理解する。
地域の定義	子ども達が住んでいる「居住地域」で、子ども達が育っていく中で影響を受ける、文化や慣習を育む場所。居住地域の規模は小学校校区
効果	<ul style="list-style-type: none"> 親の自立を促す（共に生きる、地域のつくり手である） 次世代育成につながる
形式	ワークショップ形式

3) プログラムの試行

プログラム開発委員会で検討を重ねたプログラムを久留米市の幼稚園および保育園で試行した。アンケート調査の結果から、ほとんどの人（93%）には伝えたい内容が伝わったという回答があり、有効性を確認することができた。本プログラムを通じてコミュニティの必要性に気付いたという意見が多く出された。また、ほとんどの人（84%）は本プログラムのような勉強会が必要だと感じていると回答があり、ニーズが

あるということが分かった。アンケートについては資料「5. (7) 保護者のための自立と共生プログラム 試行のアンケート結果」を参照」に示す。

表 3-8 プログラムの試行

① 天心幼稚園での試行

日付	第1日目 平成20年11月12日(水) 10:30~12:00 第2日目 平成20年12月1日(月) 10:30~12:00
場所	天心幼稚園
参加者	18人

② 長門石保育園での試行

日付	第1日目 平成20年11月20日(木) 19:00~21:00 第2日目 平成21年1月15日(木) 19:00~21:00
場所	長門石保育園
参加者	46人



(3) 地域の支えあいの場の創出

誰でも世代、文化、障害の有無を問わず気軽に集える拠点となるような小規模多機能をつくり、地域の支えあいの場をつくった。そこを拠点とし、近所の住民を巻き込んだ様々なコミュニティが形成されている。

1) 小規模多機能「三原さん家」

当法人の小規模多機能事業所ポレポレの近所の住民（三原圭子さん）の敷地内の空いている倉庫を改築し、小規模多機能「三原さん家」をつくった。



図 3-1 三原さん家の概要図

この「三原さん家」は、3月末に完成予定で、4月中旬から始動する。知的障害者や高齢者だけが集えるだけでなく、地域で生きづらさを抱える精神障害者や地域の子供達やその親たちも集え、お互いに支え合える、地域の拠点、つまり、小地域コミュニティのモデルとなるような場に発展させる。

2) 小規模多機能「下宿屋 南の家 ほっと」

地域の一軒家を借り、小規模多機能「下宿屋 南の家 ほっと」をつくった。現在は、2名の障害者が親元を離れ、地域住民の支援を受けながら地域で暮らしている。また、地域の中学校で行っている障害者タイムケア事業の活動が実施されることもあり、支えあえる新たな拠点となっている。



図 3-2 「下宿屋 南の家 ほっと」の外観

(4) 当事者が主体となりつながる

当事者性を生かした新しいコミュニティのあり方を考えた。

1) 当事者が主体の引きこもり支援

引きこもり、精神・身体障害の当事者など様々な生きづらさを抱えている人たちが気軽に集える場を創出した。毎回、様々な生きづらさをテーマとして、率直に話し合い、お互い問題を分かち合うことで、障害や生きづらさは異なるが信頼関係を築いた。

さらに、その場を発展させた新しい若者の居場所「AKATSUKI」（団体の詳細については、資料「5. (8) AKATSUKI の紹介」を参照）を開設した。開設に当たって引きこもり当事者、身体・精神障害者、福祉事業者など様々な立場の人が携わった。チラシやホームページを見て遠方から参加する人も出てくるなど、コミュニティに広がりが見え始めている。

AKATSUKI をきっかけに、引きこもり当事者による引きこもりをテーマとしたリレー小説の執筆、福岡県に引きこもり支援センター設立を要望するなど、当事者が主体的に新たな活動を展開されている。

表 3-9 当事者が主体の引きこもり支援の実績

項目	実績
期 間	平成 20 年 5 月～平成 21 年 2 月
回 数	15 回
延べ人数	190 人



リレー小説はホームページで公開

2) ピア・サポート研修

当事者性を活かした谷間の支援を開拓するために、アメリカから講師を招聘し、ピア・スペシャリスト研修を開催する。研修の詳細については、資料「5. (9) ピア・サポート研修会報告書」を参照。

表 3-10 ピア・サポート研修の実績

項目	実績
関連団体	WRAP 研究会
講 師	シェリー・ミード氏 (Sherry Mead) クリス・ハンセン氏 (Chris Hansen)
期 間	2008 年 12 月 3 日～12 月 7 日

延べ人数	125人
研修内容	<p>第1日目 ピア・サポートについて</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ピア・サポートは他の援助と、どう違うのか？ ② ピア・サポートの任務について理解すること ③ 世界観という概念と、世界観がピア・サポートのあり方に及ぼす影響について <p>第2日目 ピア・サポート関係のはじめ方と傾聴の技法</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 最初の顔合わせが持つ意味と重要性について理解すること ② 最初の顔合わせが出来るようになること ③ 言葉遣いの大切さを理解し、言葉遣いに隠されている意味に気付くようになること ④ 自分の聴く能力についての理解を深める ⑤ ピア・サポートのための聴く技法について学び練習する <p>第3日目 トラウマの影響を理解し、相互的な関係を作る</p> <ol style="list-style-type: none"> ① トラウマの情報に基づくというのは、どういう意味かを理解すること ② 関係において相互に責任を持つということを理解し、実践すること ③ 自分の限界と境界線を探索すること ④ ピア・サポートにおいて、限界と境界線は何を意味しているのかを学ぶ <p>第4日目 挑発的な状況と対立の扱い方について</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ピア・サポートにおける身の安全という考え方の検討 ② 挑戦的な状況でのピア・サポートの技法の練習 ③ 対立に関して、世界観を理解する ④ 対立を切り抜けるための技術を学ぶ <p>第5日目 自分、関係、仕事を労わることについて</p> <ol style="list-style-type: none"> ① セルフケアについてのあなたの理解 ② 自分・関係・仕事をケアすることに関してピア・サポートの任務を実践する ③ ピア・サポートを実践する場について



3) 当事者が体験を話していく

地域の集会や小学校の集まり等で、当事者が、自らの体験談を話し、人と関わることで障害を乗り越えた経験や人とつながることの重要性を伝えた。

例えば、精神障害当事者が自らが住む地域校区の集会の前に登壇し、

- 自身の発病から今までの話。
- 精神的な病気になったことが辛いのではなく、理解されず孤立することが辛かったこと。
- 回復するには仲間（人とのつながり）が大切。
- 同じ校区に同じような悩みを持つ人の相談にのる事ができる。

を話した集会後、参加していた地域の人々が駆け寄る姿があり、地域で同じように悩んでいる人とつながる機会ができた。このように、当事者が発信していくことで、地域に内在する新しいコミュニティづくりのきっかけができた。

表 3-11 当事者が体験を発信することの実績

項目	実績
関連団体	・ 小学校懇談会（PTA を対象） ・ 小学校交流（小学生を対象） ・ 地域の集会（地域住民を対象） ・ 地域の井戸端会議（地域住民を対象）
期 間	平成 20 年 7 月～平成 21 年 2 月
回 数	全 7 回
延べ人数	約 300 人



(5) 最終報告会の実施

本事業の研究報告を広く啓発するため、事業推進委員を含め、久留米の一般市民を対象とし研究報告会を行った。報告会では、事業の概要の説明、事業成果について報告を行った。シンポジウムでは、事業推進委員に登壇いただき、本事業を受け、どのように感じ、今後どのような久留米市で展開していくか、ということについて議論を深めた。アンケートの結果から、参加した多くの人は良かった（84%）、支えあいの必要性を感じた（67%）、コミュニティづくりへの参加意識が高まった（85%）と回答があり、新しいコミュ

ニティづくりのあり方を久留米市民に広く示唆することができたと考えられる。

最終報告会の実績を表 3-12 に示す。報告会用の事業説明用資料を資料「5. (10) 最終報告会の配布資料」、アンケートの集計結果を資料「5. (11) 最終報告会のアンケート結果」に示す。

表 3-12 最終報告会の実績

項目	実績
開催日	2009年3月1日(日) 13:00~16:30
会場	久留米市役所 くるみホール
延べ人数	306人
内容	<p>1. 久留米市長挨拶</p> <p>2. 事務局より事業概要の説明 「谷間の支援を障害者と地域の人でつくる事業」とは?</p> <p>3. ビデオ鑑賞 ・ 『引きこもり当事者のメッセージが発信されるコミュニティ』</p> <p>4. シンポジウム① 『生きづらさや孤立はどうしたらなくなりますか』 司会： 丸林 敏幸 (障害者地域生活支援センター ピアくるめ) パネリスト： 成重 竜一郎 (厚生労働省 心の健康づくり対策官) 吉村 文恵 (NPO 法人 全国引きこもり KHJ 親の会) 野口 明仁 (久留米市地域福祉課 主査) 坂本 喜教 (くるめ出逢いの会 / 精神障害当事者) ※ホームレス支援 佐保 大和 (こころの大樹 [引きこもり支援] 代表) ※引きこもり支援推進 吉武 明子 (久留米市 主任児童委員) 指定発言者： 内山 孝子 (久留米市男女平等推進センター 所長) ※デートDVフォーラムの共催 田町 菜穂子 (NPO 法人 ル・バトー 代表) ※エンパワメント・カフェ推進 磯田 重行 (NPO 法人 WRAP 研究会 代表 / 精神障害当事者) ※ピア・サポート研修推進</p> <p>5. ビデオ鑑賞 ・ 『住民の力を生かすコミュニティづくり～支援する側と支援される側と入れ替わる～』 ・ 『障害者や子ども達がつなげてくれるコミュニティ』</p> <p>6. シンポジウム② 『生きづらさや孤立をなくすためにこれからどうするか』 司会： 藤木 則夫 (厚生労働省 元社会・援護局総務課長) パネリスト： 中村 美安子 (厚生労働省 地域福祉専門官) 佐々木 崇 (ばて 代表 / 身体障害当事者) 古川 克介 (地域活動支援センターフロンティア 代表) 重永 侑紀 (NPO 法人 にじいる CAP 代表) ※自立と共生プログラム開発の推進</p>

	松本 良一 (久留米市教育委員会 学校教育課 指導主事) 鬼塚 也寸志 (久留米市保育所連盟 会長) 徳永 龍一 (NPO 法人福祉会 すまいる) 浦川 直人 (社会福祉法人 拓く)
--	--



4. おわりに

(1) 成果

制度では支えきれない谷間の支援を必要とする人や、制度横断的支援を必要とする人たちに対して支援が届くように、地域が本来持っている支援力を強化するよう「新しいコミュニティをつくり、支えあう」ことを目的として、障害者と地域の人と一っしょに考え、つくり出すことができた。

- 引きこもり、虐待、自殺、ホームレス等の制度の谷間にある人たちの支援を考えるという、大きなテーマを提示し、久留米を中心とした様々な分野、立場の人がそれぞれの問題意識を持って参加し、協働したことは、大きな成果である。
- 谷間の問題は、今は関係ないと思っている人たちにとっても地続きに一緒の問題であり、課題を一緒に解決していくことが求められている、と共通理解することができた。
- 新しいコミュニティづくりを検討する中で4つの視点（「①世代、文化、障害の有無の違いを受け入れる」、「②支えられる側と考えられている人たちが支える側にもなる」、「③高齢者、障害者、問題を抱えた子どもが地域の人をつなぐ」、「④地域住民は力を持っている」）を重視したコミュニティづくりのあり方を提起し、それをベースにコミュニティづくりの拠点も創設することができた
- 新しい支え合いの可能性を見出し、そのあり方を絵やDVDに表現したことは今後の啓発の手段としての効果は大きいと考える。
- 新しい支え合いの必要性を行政はじめ事業に関わった1,000人以上の市民に啓発することができた。
- 当事者が主体のつながりのあり方を示唆することができた。
 - ひきこもり当事者と支援者が主体となり運営する若者の新しい居場所「AKATSUKI」が開設された。福岡県に引きこもり支援センター設立を要望するなど、当事者が主体的に新たな活動を展開している。
 - ピア・サポート研修を行い「コミュニティづくりの基礎」について学ぶことができ、今後当事者がつながっていく基礎をつくることができた。
 - 当事者が地域で自らを発信していくことで、地域で同じように悩んでいる人とつながる機会を作ることができた。

(2) 成果物

- 事業推進委員の情報を掲載するホームページ（資料「5.（12）事業推進委員ネットワークの活用」）
- 子どもを持つ保護者のための自立と共生プログラム（資料「5.（6）保護者のための自立と共生プログラムの内容」）
- 引きこもり当事者によるリレー小説
- 絵で見る「新しいコミュニティづくり」の小冊子（資料「5.（13）新しいコミュニティづくり」）
- 本事業で取り組んだ新しいコミュニティづくりのあり方を示唆するビデオ（付属DVD）
 - ①「住民の力を生かすコミュニティづくり」
 - ②「障害者や子どもがつなぐコミュニティづくり」
 - ③「引きこもり当事者のメッセージが発信されるコミュニティ」

(3) 今後の展開

本事業では、「新しいコミュニティづくり」のあり方の方向について示唆することができたが、久留米市の地域を巻き込んだ新しいコミュニティづくりはまだ始まったばかりである。制度の谷間にいる人だけでなく、障害、高齢、子どもを含めた支援を障害者と地域の人でつくる事を、今後も地道に継続して実施していく。

① 地域コミュニティづくりの拠点

地域の人々の前向きにつながりあおうとする力を生かした拠点をづくり、フォーマルとインフォーマルな支援を組み合わせ、地域の人々の支え合いをつくっていく。福祉事業者が地域住民と協働して新しい福祉事業を展開していく。

- 社会福祉法人 拓くの今後の事業展開
 - 三原さんの家（安武校区）
 - 下宿屋「南の家ほっと」（南校区）
 - FOODS CAFE YUME（御井校区）
 - レスパイトハウスポレポレ（学齡児の宿泊体験の場）（南薫校区）
 - 新たな支え合いの場の新設（荘島校区）

② 異領域とのコラボレーション

同業種（障害福祉）だけでなく、異業種とのコラボレーションの機会をつくっていき、障害当事者や谷間の支援団体との協働のあり方をさぐっていく。

- 介護保険事業所
- 保育所（保育園、幼稚園）
- 谷間の支援をしている NPO 法人やボランティア団体等の支援団体
- まちづくり振興会など地域住民の集まり
- 地域福祉を担う民生委員、児童委員等

③ コーディネーター、ファシリテーターの育成

新しい支えあいをするためにはさまざまな場面や機会で見知らぬ人の支えあいの必要性を啓発していくことが大切である。また、情報交換し、様々な支えあいのアイデアや実践することが大切である。

そのためにはその集団のファシリテーターが必要である。また、人、団体、情報をつなげるコーディネーターとしていく人が必要である。新しい支えあいをつくるためには、ファシリテーターやコーディネーターを育成が欠かせない。

5. 資料

(1) 事業推進委員名簿

事業推進委員の一覧を以下に示す。

表 5-1 事業推進委員名簿

#	氏名	所属
1	飯田 博利	福岡県 障害福祉課 課長補佐
2	井手 信	聖マリア学院大学 学院長
3	井上 謙介	久留米市 市民部市民活動振興室 コミュニティ推進主幹
4	今井 正雄	久留米ゼミナール 理事長 (若者自立支援塾)
5	岩澤 和子	久留米市 保健所 保健監
6	内山 孝子	久留米市 男女平等推進センター 所長
7	漆原 教弥	久留米市 社会福祉協議会 地域福祉課主査
8	大森 伸昭	西日本新聞社 久留米総局長
9	小田 洋子	中小企業家同友会
10	鬼塚 也寸志	久留米市保育所連盟会 会長
11	倉知 延章	九州産業大学 国際文化学部臨床心理学科 教授
12	黒岩 嘉弘	厚生労働省 社会・援護局 障害福祉部 障害福祉課 課長補佐
13	酒井 太一	久留米大学医学部看護学科 講師
14	佐保 大和	こころの大樹 代表
15	坂本 明子	久留米大学精神神経科 / WRAP 研究会
16	重永 侑紀	NPO 法人 にじいろ CAP 代表
17	高柳 光利	久留米市 子育て支援部幼児教育研究所 指導主事
18	田町 菜穂子	NPO 法人 ル・バトー 代表
19	堤 在論	社会福祉士会
20	徳永 龍一	NPO 法人福祉会すまいる 理事
21	富田 伸	富田医院 院長
22	中村 美安子	厚生労働省 社会・援護局 地域福祉課 地域福祉専門官
23	野口 明仁	久留米市 地域福祉課 主査
24	野嶋 さよえ	久留米地域市民ボランティアの会 (KOVK)
25	早川 成	天使幼稚園 副園長
26	日高 艶子	聖マリア学院大学 看護学部 準教授
27	藤木 則夫	厚生労働省 元社会・援護局 総務課長
28	松本 良一	久留米市 教育委員会 学校教育課
29	丸林 敏幸	障害者地域生活支援センター ピアくるめ
30	水島 秀雄	久留米市 子育て支援部子ども育成課 課長補佐

31	山口 己貴子	地域活動支援センターのぞえ 所長
32	吉岡 マサヨ	ファミリーサポートセンターくるめ 代表
33	古川 克介	地域活動支援センター フロンティア 代表
34	吉田 晃児	ホームレス支援 NPO 法人久留米越冬活動の会
35	吉武 明子	主任児童委員
36	吉永 美佐子	高齢者快適生活づくり研究会 タウンモビリティ
37	吉村 文恵	引きこもりの親の会 楠の会

合計 37 名 (五十音順、敬称略)

(2) 第3回 事業推進委員会(シンポジウム)

1) ミニシンポジウム:「住民は力を持っている」

テーマ:

「住民は力を持っている」

司会:

古川 克介 (地域活動支援センター フロンティア)

パネリスト:

井手 信 (学校法人聖マリア学院 学院長)

漆原 数弥 (久留米市社会福祉協議会)

木村 真彦 (NPO 法人 久留米越冬活動の会)

井上 謙介 (久留米市市民部市民活動振興室 コミュニティ推進)

古川 それでは各人自己紹介をお願いします。

漆原 久留米市社会福祉協議会の漆原です。社協の谷間の支援の現状を把握してきました。言いたいのは、社協は高齢者だけを対象とするわけではなく、地域福祉をやっていくところです。できていないこともあります。社協は高齢者だけではなく精神障害者、母子家庭、生活困窮者をどうするのかを考えていくべき機関です。

井上 4月からこの職についているので、地域福祉について勉強しているところです。久留米市は、市民と協働し、市民の自立的な活動を支援していくところです。久留米市では、安全安心な地域の確立などが示されています。市民活動振興室の役割は、街づくりの支援、校区コミュニティの再編に取りくんでいます。子ども会、自治会、校区で街づくりに取り組むように支援する27校区中25校区に設置されています。27校区を組織する取り組みを行い、NPOや市民団体と協力していくように考えています。

木村 私は牧師が本職です。ホームレス支援はライフワークで行っています。ホームレス支援では、久留米周辺のホームレスの方の支援をしています。炊き出しでは、衣服、医療、食事の提供に取り組んでいる。医療については、聖マリア病院と連携が取れている。生活保護を受けたい人、人権保護の回復などについての相談支援も行っています。また、人権の保護に取り組んでいます。入院支援も行っています。入院を希望している人でも、重篤なケースではないので、帰そうとします。そうすると、話し込みを行い、他の病院を紹介してもらうようにしました。自立支援にも力を入れています。5年で100数名の自立を支援することができました。自立支援は、心の通った、希望を持った、目標をもった支援を行うことです。1年前まで、ホームレスだった方が、今は、ホームヘルパーを取るために専門学校にいらっている。一人の人の人格と関わり続けることが大切だと思います。

井手 木村牧師が言っていたことを私も言いたい。人の価値は、生産性で決まるものではないと思います。こういう時代だからこそ、日本が成熟した社会になるかどうかは我々で決まってくると思います。社会とボランティアの科目を設置しました。地域でボランティアを行うと単位となるように認めています。必須科目にしたかったのですが、教育環境づくりの整備が未だ出来ていません

が、さらに学生の学びを深めたいと思います。地域貢献が大学の機能の重要な部分だと思っています。当法人は、ケアハウスと授産施設を持っています。ヘルパーのニーズがあるにもかかわらず、事業の縮小を考えなければいけない状況です。ケアハウスには健康なご老人が生活されています。そのような方に、地域に出ただいて、学生の教育にも参加してもらっています。大成園では、今の不況のあおりを受けて受注が減少し、収入も減っています。そのため、工賃が下がっているのが現状です。継続して地域の中で生活をしていくには、かなり厳しい状況にあります。その中で、久留米市との連携を持ち、協定を結びました。中心市街地の活性化推進事業として2月1日に商店街（一番街）の一角で高齢者の健康相談などを行います。健康相談の場だけではなく、障害者高齢者、育児に疲れた方のコミュニティ作りのきっかけになればいいと思っています。

古川 これからは、行政と一般市民という立場で皆様には喋っていただきたいと思います。コミュニティの再生という話はよく耳にしますが、どういうコミュニティを望むのか？久留米市行政はどのようにかんがえるのかを尋ねたいと思います。

漆原 協議会は行政でくられるのは抵抗がありますが。コミュニティはすでに壊れている状況です。個人的にもそう思います。気安く昔の地域を取り戻そうと、映画「3丁目の夕日」みたいな地域を想像しますが、あの頃のような町にはできないと思っています。少なくとも、隣に誰が住んでいるのか知っておこうよ、と思います。行政的にいうと、コミュニティの回復を行政が言うのはおかしな話ではないでしょうか。そうしなければ本物になりえないのではないかと、地域で暮らす住民は理解した方が良くと思っています。見守りが出来る町にしようと言われてすると、ちっとも本物になりません。自分たちでやろうよと思っています。そういうアプローチをしていく必要があると思っています。社協は影で支援をする黒子ですね。

厳しい立場に置かれている人は増えてきています。その状況を住民に呼びかけ、知っていただくように社協がすべきことだと思います。これからは、地域の支え合いをやろうとしています。社協は高齢者だけでなく地域の人だけで回復できないことに取り組むべきだと思います。状況を知っている人が連携をとり、つながっていきたくと思っています。

古川 つぎは、住民の立場でお願いします。

木村 ホームレスは地域コミュニティからは外れていますが、ホームレス同士のコミュニティはあります。生活保護が増えていますが、このような状況の中で相談も出来ない人たちが増えてくるのではないのでしょうか。私はホームレスが地域から外れているとは思いません。私たちの意識の中で外しているから外れてしまっているのではないのでしょうか。支援が成り立っていないから、地域から外れています。人が交わりを深めていくべきではないのでしょうか。

古川 排除する気持ちが、人を排除しているのではないかと。最小限度の家族が食卓を囲むことの大切さを人は理解しているのか。最小単位の家族の考えが壊れているのではないかと。職場ですら仲間意識がない。そういうことをいかに回復していくか？

木村 家族論ではないが、ホームレスの人もみんな奥さんがいて子供がいた人もいます。借金をしたとか体調が悪くなったことにより、家族が崩壊していきます。真面目な人が多い、中には大変な人もいるが…。会議は、昼間にやったほうがよいと思っています。自宅では家族が待っているのではないのでしょうか。だから、あえて家族みんなでご飯を食べる時間をもつようにスローガンを掲げるぐらいの姿勢が必要なかもしれません。今の子供は、自宅でご飯食べる社会構造になっていないように感じます。家族で時間をもつことがなくなっているような気がします。家族を大事にするライフスタイルを確立していくべきだと思います。もう一度、生きる原点をみつめた

ほうがいいのではないのでしょうか？

井上 なるほどと思いました。家族のふれあいからコミュニティが始まりだと思えます。ノー残業デーをつくりましたが、家族のためにではなく、飲み会にいつているのが現状です。もう一度皆に話してみようと思えます。

古川 自主的な活動が必要でないのでしょうか。最小限の家族のコミュニティを確立したほうがいいのかということですね。

2) ミニシンポジウム:「支援を必要とする人がつないでくれるコミュニティ」

テーマ：

「支援を必要とする人がつないでくれるコミュニティ」

司会：

丸林 敏幸 (障害者地域生活支援センター ピアくるめ)

パネリスト：

徳永 龍一 (NPO 法人福祉会 すまいる)

富田 伸 (富田医院 院長)

野嶋 さよえ (久留米地域市民ボランティアの会)

笠島 達也 (西日本新聞社 大牟田支局)

丸林 このテーマは難しいと思いますが、助け合うことによってコミュニティが成り立ちます。一定の地域で子育てや障害者の支援をつくっていくと、昔と一緒に、みんな助け合っていないといけないのが分かるのかなと思います。この取り組みがコミュニティを作るための手助けになったらと思っています。

丸林 自己紹介をお願いします。

笠島 大牟田からきた西日本新聞の笠島です。大牟田市の中学校で認知症の取組の発表会がありました。認知症の人が迷子になって、地元の人たちが、垣根を越えて探すことをやっています。その中には子供たちが入っています。子供たちが勉強し、それを親に伝える。認知症の人を助けることによって、お互いが繋がることをやっています。発表会は今回で5回目になります。他の地でも増えました。搜索訓練が広がりを見せています。支援をする人を媒介にして、広がってきている。ケアをする人たちのケアを誰がするのか？支援者の人材がいない状態があります。そのようなときに公のものを使っていくのも必要だと思います。

野嶋 国際協力・環境保全の団体を運営しています。環境保全の活動として、マイ箸づくりをやっています。そのような活動を通じて、いろんな付き合いを広げていけたらなと思っています。

丸林 環境保護の問題でのコミュニティができていて、関連性はあると思います。

富田 地域ってなんだろう？と思います。私は久留米の者ではありませんでした。自分は伊万里のコミュニティが嫌い出てきました。今住居では隣近所は知りません。回覧板くらいのおつきあいです。医師会や地域でのつながりはあります。櫛原町という区切りが地域ではありません。地域の概念が人によって違います。家族も地域も壊れています。これを超えたコミュニティを作っていく会だと思っています。

分けることで暴走が起こっています。分けることをやめる事が必要ではないのでしょうか。専門性の限界がきています。自助グループが出来てきました。専門性に頼っていても駄目で、当事者が集まってきた。そのような関係性により再発を減ってきたと思います。当事者グループは大事です。医療と上手く折り合っていくか、今はうまくできている気がします。今の動きにいいものを

たくさん見えています。

徳永 福祉会スマイルの理事をしています。それは10年前に障害児をもつ親の会から立ち上がったものです。特徴があったのが荒木校区の人たちの集まりだったということです。年齢に幅がありました。私の上の子が卒業すると同時に作業所を立ち上げました。今、仕事をしています。地域とのつながりを大切にしようとして小中学生の福祉体験の受け入れをやっています。この前、小学校に訪問にいったら、利用者はスターでした。中学校では、キャンプに参加、クリスマス会にはブラスバンドが参加してくれます。障害者に対する怖いという意識がありますが、いつも見かけていれば怖くありません。そんなことにこだわりながらやってきました。可能性は否定するものではないと思います。10年間で色んな出会いがあり、周りの人から、子供たちから助けられていることも多い。ペットボトルを開けることができない高齢者がいます。うちの利用者は力があります。それぞれが出来ないことをカバーしながら、やっていけると思います。

今までの日本のコミュニティは豆腐社会でした。個々人が大事にされすぎて、今は、大豆社会だと例えた人がいました。これからは納豆社会を目指すべきだ。我々は納豆菌になりたい。情熱をもって接すること、かき混ぜること。このように集まってかき混ぜてもらいたい。さらにおいしくするには、塩などの調味料が必要です。それはまだ分かっていません。最近、障害者が絡む事件がいろいろある。障害者が事件をおかすわけではないのに。熱すことをやめないように理解していただくことが必要です。

笠島 世代のバランスがとれています。大牟田市の場合は高齢者だけの地区も多いです。バランスが取れなくなってきたところは公にやるしかないと思います。小規模多機能施設に地域交流スペースを設け市民に開放します。スタッフとしてきているので、小規模多機能のスタッフ、建物には補助金がでます。スタッフは若い人です。何か種をまかないと今後成り立ちません。自治会の高齢化、組織力の低下などがあります。大牟田市は40%を下回っているところもあります。子供を巻き込み、民生員も入り、垣根を越えてやらないと成り立ちません。一つの地区から始まったものが、大牟田市内に広がっています。こういうつながりを求めています。家族以外の介護者を求める、スタッフの担い手も確保する必要があると思っています。

丸林 事業所が拠点となり、広げてもらうといいですね。異文化を含めての話をお願いします。

野嶋 今年の夏、エールぴあの依頼で、多国籍料理の講師をやって欲しいといわれました。久留米に住んでいる留学生などに声かけをし、料理を教えてもらい、文化の話も聞きました。とても楽しかったです。参加者も興味心身で調味料などの話を聞いていました。久留米では仕入れられないものもあって、分けてもらっていた。とても楽しかったです。

丸林 趣味を講じた異文化交流も必要ですね。

富田 コミュニティがよくわかりません。小学校は、付属小学校だし、隣との繋がりもありませんでした。地域に何も無いから魅力が無いのかもしれませんが。哺乳類は、他者の援助が無くては生きていけません。人は、かわいがられないといけない。その代償として人を助ける行為を行う。医者になってよかったことは、支援することによって、得るものがあることです。地域に何か魅力あることをみつけられるとよいのではないのでしょうか。

徳永 なぜ赤ちゃんはかわいいか？それは、支援が要るからではないかといわれています。みんなから受け入れてもらう必要があるからです。地域でしか出来ないこと、目的がちがっても混ざり合う団体であるべきだと思います。

丸林 支援者があつまることによる地域の活性化は、可能性があるのではないか？しばらく久留米で追求できたらいいと思っています。

(3) デートDVフォーラム

谷間の支援を障害者や地域の人でつくる事業

デートDVって、どんなこと?

「このごろよく耳にする【デートDV】って、なんだろう、
 どんなことをいうの?」
 「子どもたちに、相手を傷つけない交際のありかたを伝えたい」……
 そんな疑問や関心のある方、【デートDV模擬授業】を観てください。
 デートDVって何なのか、なぜ起こるのか、
 どうすれば問題の本質を若者に
 伝えられるか、一緒に考えあいましょう。



日 時 平成20年10月5日(日)
 9時30分～16時
 会 場 久留米市男女平等推進センター210・211 研修室

●午前の部

デートDV啓発活動・調査研究活動をしている民間3
 団体による、中学生対象(予定)のデートDV啓発模
 擬授業の実演

【参加団体】 えばの会(大分市)
 さくらんぼ(久留米市)
 NO!SHくるめ(久留米市・福岡市)

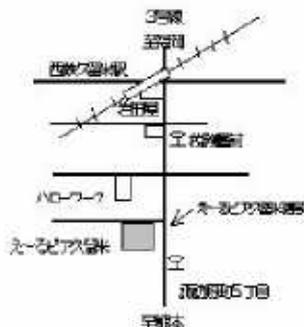
●午後の部

模擬授業をもとに、デートDVって何なのか、本質や
 問題点は何なのか、どうすれば若者たちに伝えられる
 のか、わかりやすいのか、などを意見交換



対 象 関心のある方 40名
 参加費 無 料
 申 込 9月8日(月)から受付開始 先着順
 久留米市男女平等推進センター窓口、電話、FAX
 Eメール、電子申請で。一時保育、手話通訳は、
 9月29日(月)までに要予約

主催 / 社会福祉法人拓く・久留米市男女平等推進センター



久留米市男女平等推進センター

〒830-0037
 久留米市諏訪野町1830-6 えーるピア久留米内
 TEL 0942-30-7800/FAX 0942-30-7811
 URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>
 Email danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp

*駐車場には限りがありますので、出来るだけ公共交通機関をご利用ください。

みんなが学びあえるデートDV



(4) 働く男女のエンパワメント・カフェ

働く男女のエンパワメント・カフェのチラシを以下に示す。

1) 第1回 働く男女のエンパワメント・カフェの広告


 男女平等推進センター 共催企画2008

働く男女の エンパワメント・カフェ (全6回)

オープンします

働く男女が、毎回テーマを決めてお茶を飲みながらざっくばらんに語りあいます。例えば、

- ① 子育て・介護は誰がするの？
- ② フリーターはずっとこのままなの？
- ③ 久留米の労働環境はどうなっているの？
- ④ 働くために知っておくべきことって何？

・・・など、それぞれの立場や視点から思い思いに話し合ってみると、漠然と感じていたことの問題点に気づくかも。そこから解決への糸口を探っていければいいなあ・・・そんなことで、2ヶ月ごとのカフェを開きます。お好きな回だけの参加も大歓迎！ ぜひご参加ください。(詳細は裏面にあります)

～ほんとに目指してる？
仕事と生活の程よいバランス～



第1回

5月23日(金)19:00~21:00

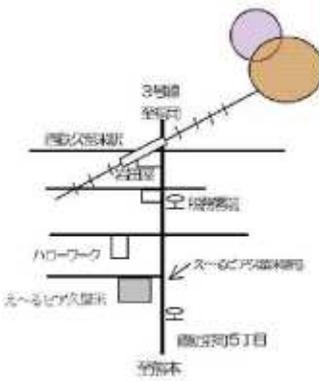

～働かってなんだ？ あなたの労働環境チェック～

内容:
 ファシリテーターより議題の提案
 グループに分かれて討論&お茶会

- 現在の働く社会状況について
- それぞれの「働く」意義について
- 理想の働き方について

ワイワイ・ガヤガヤ語りましょう……

会場: 男女平等推進センター210・211号室
対象者: 働く男女、働きたいと思っている方、およびテーマに関心がある方
参加費: 500円(会員200円) お茶&菓子つき
定員: 40名(申込み先着順)
 一時保育・手話通訳: あり(開催5日前までに要予約)
問合せ・申込: NPO法人ル・バトー
TEL: 080-6412-1054
E-mail: donburako-lebafEAU@ezweb.ne.jp



主催: NPO 法人ル・バトー
 共催: 久留米市男女平等推進センター

〒830-0037
 久留米市諏訪野町 1830-6 エーるピア久留米内
 TEL 0942-30-7800/FAX 0942-30-7811
 URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>
 Email danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp



2) 第2回 働く男女のエンパワメント・カフェの広告

男女平等推進センター 共催企画2008

働く男女の エンパワメント・カフェ (全6回)

～ほんとに目指してる?
仕事と生活の程よいバランス～

第2回 7月25日(金)
19:00～21:00
**単身家庭(だけじゃない!)の
労働問題**
～子育て・介護は誰がする?～



働く男女、働こうかな～と思っている男女が、毎回テーマを決めてお茶を飲みながらざっくばらんに語りあいます。

1 回目は『働くってなんだ』ということで、それぞれの価値観を語り合いました。

2 回目は、家庭との両立問題を柱に働くことについて考えます。

キーワードは、エンパワメント!一緒に、語り合って元気になりましょう。

語り部: 津野稔一さん
(WPAP ファシリテーター)

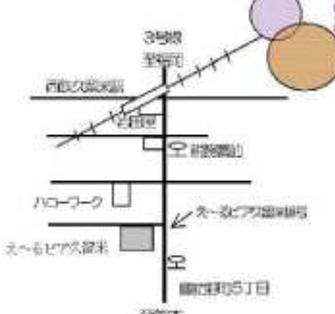
【私が働けなくなった理由～ありのままの自分に自信がもてるまで～】
*単身赴任、離婚、うつ病発症、失職、父子家庭と津野さんの体験を通して、『働くこと』を考える。

お話を聞いた後、グループ討論、お茶会

会場: 男女平等推進センター210・211号室
対象者: 働く男女、働きたいと思っている方、およびテーマに関心がある方
参加費: 500円(会員200円) お茶&菓子つき
定員: 40名(申込み先着順)
一時保育・手話通訳: あり(開催5日前までに要予約)
問合せ・申込: NPO法人ル・パト
TEL: 080-6412-1054
E-mail: donburako-lebateau@ezweb.ne.jp

主催: NPO 法人ル・パト
共催: 久留米市男女平等推進センター
社会福祉法人 拓く

〒830-0037
久留米市諏訪野町1830-6 えーるピア久留米内
TEL 0942-30-7800/FAX 0942-30-7811
URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>
Email danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp



3) 第3回 働く男女のエンパワメント・カフェの広告


 男女平等推進センター 共催企画2008



働く男女の エンパワメント・カフェ



全6回

第3回

10月17日(金)

19:00~21:00

**若年層の就労問題
について語ろう!**

働く男女、これから働こうと思う男女が、毎回テーマを決めてお茶を飲みながらざっくばらんに語りあいます。

若年層の就労意識や現在おかれている状況などについて、パネリストたちが討論を行います。その後グループに分かれて、ディスカッション。キーワードは、エンパワメント(自分自身の本来持つ力・自信を取り戻し、社会へ働きかける)です。

一緒に、語りあって元気になりましょう。

パネリスト : ひきこもり・精神障害者

厚生労働省職業安定局

倉知延章さん(九州産業大学国際文化学部臨床心理学科教授)

○働きにくさ○ニート・ひきこもりのモnday○働いても生活できない現状
○働くという意識の問題・自立とは、……………パネルディスカッションおよびグループ討論……………

会場: えーるピア久留米(210・211 研修室)

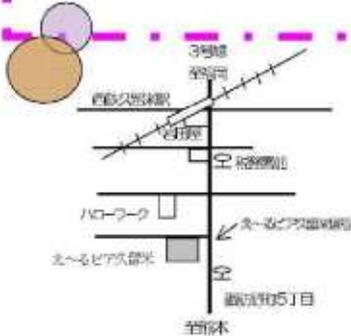
対象者: 働く男女、働きたいと思っている方、およびテーマに関心がある方

参加費: 500円 お茶&菓子つき 定員: 40名(申込み先着順)

一時保育・手話通訳: あり(開催5日前までに要予約)

問合せ・申し込み: NPO法人ル・バトー TEL: 080-6412-1054

E-mail: donburako-lebafteau@ezweb.ne.jp



主催: NPO 法人ル・バトー

共催: 久留米市男女平等推進センター
: 社会福祉法人 拓く

〒830-0037
久留米市諏訪野町1830-6 えーるピア久留米内
TEL 0942-30-7800/FAX 0942-30-7811
URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>
Email danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp

4) 第4回 働く男女のエンパワメント・カフェの広告

男女平等推進センター 共催企画2008

全6回

働く男女の エンパワメント・カフェ



第4回

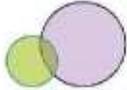
11月28日(金)

19:00~21:00

久留米の就労環境を知る

★派遣★障がい者★シニア

～住んでいる地域に隠れている

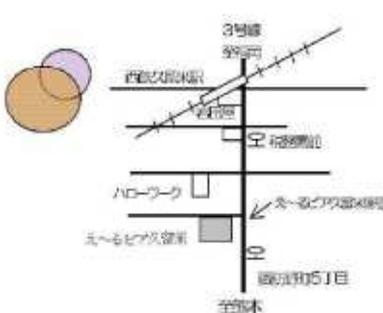


ビジネスチャンスを探ろう～

パネリスト:

- ハローワーク久留米
- 派遣社員体験者
- 障がい者自立訓練サポートセンター
[わーよか]
- コミュニティビジネス実践者

理想の働き方を他者にゆだねても無理？
それなら、作ってみてはどう？私たちが住
んでいる町で、理想の働き方を探ろう！



会場: 男女平等推進センター210・211 研修室
(えーるピア久留米内)

対象者: 働く男女、働きたいと思っている方、
およびテーマに関心がある方

参加費: 500円 お茶 & 菓子つき

定員: 50名(申込み先着順)

一時保育・手話通訳: あり(開催5日前までに要予約)

問合せ・申し込み: NPO法人ル・バトー

TEL: 080・6412・1054

E-mail: donburako-lebateau@ezweb.ne.jp

主催: NPO 法人ル・バトー

共催: 久留米市男女平等推進センター
: 社会福祉法人 拓く

〒830-0037
久留米市諏訪野町 1830-6 えーるピア久留米内

TEL 0942-30-7800/FAX 0942-30-7811

URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>

Email danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp



5) 第5回 働く男女のエンパワメント・カフェの広告

男女平等推進センター 共催企画2008

全6回



働く男女の エンパワメント・カフェ

第5回
1月23日(金)
19:00~21:00

働くために必要なこと
～少数精鋭で社員をまとめる
企業の視点～

働く男女、これから働こうと思う男女が、毎回テーマを決めてお茶を飲みながらざっくばらんに語りあいます。4回目までは、単親家庭や若年層の困難・留米の就労環境を語り合いました。今回は実際に会社を運営している社長に登場してもらって、『働くために必要なこと』についてのパネルディスカッション、グループ討論を行います。

会場: 男女平等推進センター210・211 研修室 (えーるピア久留米内)

対象者: 働く男女、働きたいと思っている方、およびテーマに関心がある方

参加費: 500円 お茶 & 菓子つき

定員: 50名(申込み先着順)

一時保育・手話通訳: あり(開催5日前までに要予約)

問合せ・申し込み: NPO法人ル・バトー

TEL: 080-6412-1054

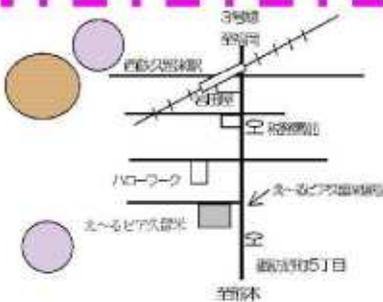
E-mail / donburako-lebateau@ezweb.ne.jp

■パネリスト
 経営者数人を調整中。
 主体性をもつ働き方とは? 会社を運営していくための工夫、努力などの話を焦点に、『働くこと』の意義に迫ります。

第6回目は
2月27日(金) 19:00~21:00
 社会保障問題～ドイツやデンマークなどの取組み

主催: NPO 法人ル・バトー
共催: 久留米市男女平等推進センター
 : 社会福祉法人 拓く

〒830-0037
 久留米市諏訪野町1830-6 えーるピア久留米内
 TEL: 0942-30-7800/FAX: 0942-30-7811
 URL: <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>
 Email: danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp





6) 第6回 働く男女のエンパワメント・カフェの広告

男女平等推進センター 共催企画2008

働く男女の エンパワメント・カフェ



第6回

2月27日(金) 19:00~21:00
海外の働き方を知る (デンマーク・オランダ・スイスなど)
 ~そして、あなた自身の働き方を
もっと見つめてみよう~

会場: 男女平等推進センター210・211 研修室
 (えーるピア久留米内)

対象者: 働く男女、働きたいと思っている方、
 およびテーマに関心がある方

参加費: 500円 お茶&菓子つき

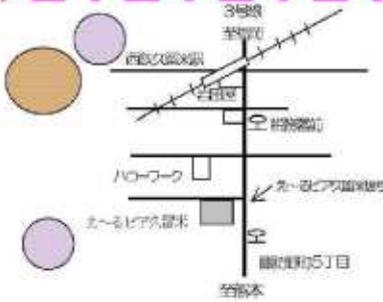
定員: 50名(申込み先着順)

一時保育・手話通訳: あり(開催5日前までに要予約)

問合せ・申し込み: NPO法人ル・バトール

TEL: 080-6412-1054 E-mail/ donburako-lebateau@ezweb.ne.jp

働く男女、これから働こうと思う男女が、
 毎回テーマを決めてお茶を飲みながらざっ
 くばらんに語りあいます。これまで、単親
 家庭や若年層の問題、久留米の就労環境、
 そして、経営者による主体性を持った働き
 方の提案など、さまざまな視点から語り合
 ってきました。
 今回は、実際に海外の働き方を知り、グル
 ープ・ディスカッションを行います。
 ツイツイガヤガヤ、語り合しましょう。



主催: NPO 法人ル・バトール
 共催: 久留米市男女平等推進センター
 : 社会福祉法人 拓く

〒830-0037
 久留米市諏訪野町 1830-6 えーるピア久留米内
 TEL 0942-30-7800/FAX 0942-30-7811
 URL <http://www.city.kurume.fukuoka.jp>
 Email danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp



(5) 保護者のための自立と共生プログラム開発委員名簿

自立と共生プログラムの開発委員の一覧を以下に示す。

表 5-2 自立と共生プログラムの開発委員名簿

#	氏名	所属
1	磯田 重行	WRAP 研究会
2	市川 泉	社会福祉法人 拓く
3	今村 純子	保護者
4	入部 祥子	こぐま福祉会
5	浦川 直人	社会福祉法人 拓く
6	鬼塚也 寸志	長門石保育園 園長／久留米市保育所連盟会 会長
7	坂口 絹代	長門石保育園
8	重永 侑紀	NPO 法人 にじいろ CAP 代表
9	高田 吉優	保護者
10	高柳 光利	久留米市子育て支援部幼児教育研究所
11	田町 菜穂子	NPO 法人 ル・バトー 代表
12	辻 陽子	保護者
13	中川 真理子	社会福祉法人 拓く
14	野上 真紀子	保護者
15	馬場 篤子	社会福祉法人 拓く 常務理事
16	早川 成	天使幼稚園 副園長
17	尾藤 春美	保護者
18	平山 裕子	保護者
19	藤林 詠子	久留米市議会議員
20	松本 良一	久留米市教育委員会 学校教育課
21	水島 秀雄	久留米市子育て支援部子ども育成課 課長補佐
22	宮崎 真澄	保護者
23	吉岡 マサヨ	NPO 法人 ル・バトー
24	吉武 明子	久留米市民生委員 主任児童委員

合計 24 名（五十音順、敬称略）

(6) 保護者のための自立と共生プログラムの内容

様々なシチュエーションについてワークショップ形式で語り合い、子育てと地域コミュニティについて考える。プログラム内容の詳細については下図を参照すること。

子育てと地域(コミュニティ)

人づくりは、地域づくり
人が育つには「あえて」のお節介
「あえて」のつながりが必要です！

就学前の子どもを育てる親たちのための
自立と共生プログラム

1

認識して欲しいこと

- 親自身が「地域」に積極的にかかわることの大切さ
- 子どもの問題解決能力は、様々な地域の大人と関わることで育まれる
- 子どもの問題は地域の人とつながるチャンス
- コミュニケーション力は、違いを認めることから始まる

2

ワークショップでチャレンジ
(参加型体験学習)

- ひとりひとりを尊重する時間
他の人の話や行動を否定しない時間
- 正しい？一般的な？ではなく自分の意見を伝える「わたしは～」メッセージの時間
- 共通理解をめざす時間
- 守秘義務

3

第1日目

4

はじめに・・・

- まずは、参加者どうして ごあいさつ！
- 隣に座ったということも、大切な絆です。地域づくりの第一歩です。
- 今日、子育てと地域のつながりを考えます。

5

最近の子育て状況...大変です！

- 児童虐待相談件数：約4万人
- ドメスティック・バイオレンス：4人に1人の女性が経験
- 不登校：全国で約13万人
- ひきこもり：全国で約200万人

人と人とのかかわりの中で育つ子どもたち。
多様な人の存在を肌で感じる育ちが強さを育てます。

6

いろいろな人の話を聞く

- 私たちの周りには、さまざまな人たちがいます。
- さまざまな人の存在を「知っている」から、「実感する」へ変化させてみませんか？

7

まず、当事者の声を聞いてみよう

- ① 精神障害をもった人の体験談
- ② 両親のDVを見て育った人の体験談

- 当事者の話を聴いての感想を話しましょう

子育てしている親も、「孤立感」を持たされているんだ、ということに気づいてもらう

8

親は支えられる側でもあり、支える側でもある

- あなたは、3歳の子と、生後6ヶ月の赤ちゃんをベビーカーに乗せて実家に帰るために、電車に乗りました。
- ところが、赤ちゃんがウンチをしたようで、臭ってきました。オムツが汚れて気持ち悪いでしょう。赤ちゃんはぐずって、泣きわめいています。

・電車の中を地域に孤立してみよう。
・支援されている、しているだけの方通行はありえない、一対互いの2面性を持つ

9

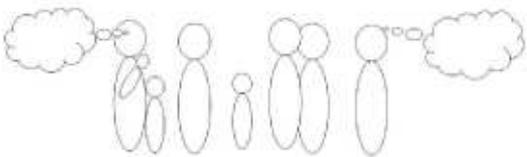
親は支えられる側でもあり、支える側でもある

- あなたはどんな気持ち？（支援される人の立場から）
 - ① 迷惑をかけて申し訳ない
 - ② 支援してほしい
 - ③ 気づかない振りして欲しい
- あなたはどんな気持ち？（支援する人の立場から）
 - ・「支援を受ける人」が、迷惑をかけているのではないかと「不安」に感じましょう。そのために、「迷惑がられてまで支援されたくない」、「助けを求められない」と感じ行動化しない。
 - ・逆の立場になっても、「支援を受けること」を甘えと捉えてしまい、「支援の手」を自ら差し伸べないことも起こっている。

10

親は支えられる側でもあり、支える側でもある

- ロールプレイ「積極的に関わってみよう！」
- 支援する側にとって



・同じテーブルを囲んで、ロールプレイをする。
・知らん顔から、アクションを起こしてみよう！（積極的に関わる）
・気配りのつもりの「知らん顔」が、孤立感につながっていないだろうか・・・

11

お互い様のつながりや絆が生まれる

- 子育てにおいて各家庭でこだわりがあると思います。
- あなたは、子どもの健康には気をつけています。なるべく自然食を食べて欲しいと思い、努力もしています。
- ところが、お隣のおじいちゃんは子どもに会うと、いつもお菓子をくれます。しかし、そのお菓子はあまり健康に良さそうではありません。どうしましょう？！



12

お互い様のつながりや絆が生まれる

- あなたは「そのとき」どう感じるのでしょうか？そして、どう対応すると思いますか？



13

自分のこだわりか、つながりか？

- 地域のつながりが大切だと考えていても、実際にこのように、こだわりをとるか、つながりをとるのか、という場面に出くわします。
- これからの時代だからこそ、「あえて」地域のつながりを大切にする方を選択することが「子育て」の面から考えてみても大切であることを気付いていただきたい。

14

今回のポイント

- 当事者の語る言葉には強い力がある。言葉を発していくことが大切。
- 親は、支えられる側であり、支える側でもあることに気づく。社会を構成している一員である意識が必要。
- 人との関わりは、わずらわしさ、ストレスを伴うものであるが、「お互い様」のつながりや絆が生まれるチャンスでもあると捉えることも必要。

15

クロージング

- 正直な「今」の気持ちを言葉にしてお互いに聴きあいましょう。
- 気持ちに良い・悪いはありません。どのような気持ちを持っていてもよいのです。自分の正直な気持ちを肯定しながら、どのように行動するかを選べる親でありたいものです。
- 気持ちを表現する事も「つながりへの働きかけ」の第一歩です。

16

第2日目

17

子どもの育ちに大切なもの

- 子どもがイジメや不登校などの強いストレスがかかる場面に直面しました。

18

子どもの育ちに大切なもの

・ 親にも強くて欲しいと弱くて欲しい。
(強弱して欲しいと強く望むと、親はパーフェクトな存在でいなければならない)

- 誰に相談して欲しいですか？
① 友人 ② 親 ③ 先生 ④ 親以外の誰か
- 親以外の大人の存在のメリット



・ 誰か様 (いとこ、おじさん、おばさん、友人の嫁など)
・ メリットは、「客観的に見せる」など
・ 同じ気質、DNAの人だけではなく、違う人の人生観や考え方を知ることも大切

19

親だけの価値観でいいの？！

- 親 子ども…「そもそも」似ている
+
- 親のふるまいをみて学ぶ「問題解決方法」
↓
問題解決法に広がりが無い！
- 隣近所のように自分が選べない人たちと接すると、想定外の「問題解決方法」を得るチャンスにもなる。
↓
問題解決法は人の数だけあるんだな〜！と知らず知らず学ぶことになる。※これが将来、孤独感を減少できる源になる。

20

あえて地域の人とつながってみよう

- 隣人の家に回覧板を持っていきますが、もっていくたびに隣人から『そこに置いて下さい』と言われる。できるか、できないかは別として、つながることを考えてみてください。

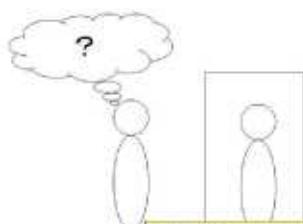


コミュニケーション力をつける。

21

あえて地域の人とつながってみよう

- つながるためにはどんな方法・工夫がありますか？



(回答例)
「お菓子をつける」、「メモをつける」、「持ち伏せする」

22

子育て環境を見直してみよう

- 親だけで子育てすると...
- 100点満点の存在を目指す地域ではなく
- 一人ひとりが100人とつながり、「手(手段・方法)」を100人分知っている。
- 100手を持つ存在を作る地域

「100点より100手！」
子育ての現代革命だあ！

23

子どもの問題はつながるチャンス

- B君の家に佐藤さんの子どもK君がいつも遊びに来ています。
- おとなしいB君も、K君につられつついついテンションが上がって騒ぎ出します。
- いつものように興奮したB君がK君を追い回していました。ところが、K君が家具に引っかかって、転んで、頭に2針縫う怪我をしました。

佐藤さん家のK君

- やんちゃ
- 夕方遅くまで帰らない

24

子どもの問題はつながるチャンス

- 面識のないK君のお母さんにとにかく謝りに行くことになりました。どういう風にK君のお母さんと話をしますか？
- このできごとをきっかけに「つながろう」とするのか、「つながりを切ろう」とするのか...
- 子どもたちが巻き起こす避けて通れないできごとこそが、「つながろう」を「つながり」に変えるチャンスと捉えよう！

25

子どもの問題はつながるチャンス

- これをきっかけにK君の家庭の状況も知ることが出来ました。K君の帰りが遅いのは、お母さんの帰りが遅いということを知りました。今日も夕方6時を過ぎてもK君は帰ろうとしません。あなたはどのようにしますか？ポイントは「あえて、つながろう！」です。

- ① 6時になったので返す
- ② 習い事をして、K君が遊びに来ないようにする
- ③ お菓子を持たせて返す
- ④ ご飯を出す

26

子どもの問題はつながるチャンス

- K君はB君家以外の家に行っても、入り浸って帰ろうとしないということを知りました。あなたはどのようにしますか？
- またまた、K君によって「あえてつながろう」のチャンスが訪れました。

27

今回のポイント

- 異文化を受け入れる力を育てよう
 - 垣根をつくらない、排除しない
- 積極的、意識的にあえてつながろう
- 課題こそがつながるチャンス
 - K君のような子どもがあらごちに顔を出している間に、いっぱい関わってみよう！
- 地域コミュニティで子どもを育てることは重要
 - 「K君の家のことだから、家族が〜すべき」ではなく、「すべき」を超えて「みんなで何ができるか」を考えてみよう！

28

クロージング

- 正直な「今」の気持ちを言葉にしてお互いに聴きあいましょう。
- 気持ちに良い・悪いはありません。どのような気持ちを持っていてもよいのです。自分の正直な気持ちを肯定しながら、どのように行動するかを定める親でありたいものです。
- 気持ちを表現する事も「つながりへの働きかけ」の第一歩です。

29

(7) 保護者のための自立と共生プログラム試行のアンケート結果

1) プログラム 1 日目のアンケート結果

調査対象

性別	男性 9 名、女性 22 名、未回答 1 名
年齢	20 代 2 名、30 代 20 名、40 代 6 名、50 代 3 名、未回答 1 名
子どもの人数	0 人 2 名、1 人 10 名、2 人 13 名、3 人 5 名、5 人 1 名、未回答 1 名
子育て年数	1 年未満 2 名、1～3 年 6 名、4～6 年 10 名、7～9 年 5 名、10 年以上 6 名、未回答 2 名

回答結果

(ア) プログラムの内容は分かりましたか？

(N=29)

大変よくわかった	17
だいたいわかった	10
どちらともいえない	2
よくわからない	0
わからない	0

(イ) プログラムの内容で分かりにくいと感じた点は？

- ・ 例題が難しかったのでなかなか捉えにくかった。
- ・ 体験談の中で精神的に孤独になった元々の原因（子どもの頃にあった体験だとか心当たりがある事など）を知りたかった。
- ・ コミュニティに対する各々の捉えかた。

(ウ) 子育てについて語り合うことの大切さを感じていますか？

(N=32)

よく感じている	27
だいたい感じている	4
どちらともいえない	1
あまり感じない	0
全く感じない	0

(エ) 家庭以外で子育てについて語り合う場所がありますか？

(N=33)

ある	23
ない	10

「ある」と答えた方へ、家庭以外で子育てについて語り合う場所がありますか？

(N=31)

サークル	3
友人達	7
実家	5
兄弟姉妹	2
マンション内	2
近所	2
携帯サイト	1

職場	5
幼稚園	3
子どもの友達の母	1

(オ) 子育てに関する要望はありますか？

(N=26)

ある	16
ない	10

「ある」と答えた方へ、どのような要望ですか？

- ・ 他の家庭と合同でイベントを行いたい
- ・ 挨拶ができていますか
- ・ 児童館があったり公園を作っていただきたい
- ・ 他人や身内に思いやりのある子どもに育てほしい
- ・ 誰に対してではないが、子どもとよく話をしてほしい。子どもに好きな事をしゃべらせてほしい
- ・ 子育てについて話す場がもっと増えること
- ・ 思いきり体を動かして遊べる場所の確保。子どもの安全。
- ・ 遊び場、友達関係を築くこと
- ・ 働く母の子育てに関する話を話せる場がほしい。
- ・ 防犯
- ・ 食事のこと、しかり方など
- ・ 経済的な支援（教育費）
- ・ 夏休みなど色んな思い出を作ってあげたいので、大勢で楽しい行事ができればいいと思います。

その要望を他の親といっしょに解決しようとしていますか？

(N=13)

している	3
していない	8
その他	2

具体的にはどのようなことですか？

- ・ マンションの同フロアの家庭といっしょに食事会など
- ・ こういうワークショップを受けることに大変意味があると思う。子どもを持っていない人もいっしょに受けると勉強になると思う
- ・ またお話が聞きたいです。うまく言えなくてすみません。
- ・ 安全に関しては、親が自分の子どもを守るしかないのでは・・・とあきらめています。
- ・ 休日のドライブなどに誘う。絵本の読み聞かせ
- ・ 近所の人に聞く、友達に聞く
- ・ 近所の同世代の家族に声かけをしようと思っているが、なかなか実行に移せていないのが現状です。

(カ) プログラムの感想

- ・ 色々な話が聞けて良かった
- ・ 一緒にグループの人から「人の中にいられる子に育てたい」と聞きました。現代は人と関わるのが苦手な人が多くて引きこもりの人も多いです。もし自分の子どもができたなら人の中にいられる子に育てたいです。
- ・ しっかり考えてあるプログラムだと感じました。入部さん横大路さんのお話はとても胸に響きます。このお話を通してプログラムの内容が深まり、考えることが出来て私たちの時にはなかったので羨ましいかぎりです。
- ・ 子育てには毎日直面しているものの、語り合い、意見を出し合うことはよい機会になり嬉しかったです。
- ・ 子育てについてコミュニティについてじっくり考える事がなかったので、こういう機会を与えてもらってとても貴重な時間が過ごせました。
- ・ いろんな方々の話が聞けて良かったです。

- ・皆さんとこのような場を持って話すことができて良かったです。
- ・こういう話し合いの場が今までなかったので良かった。親たちの考えや共感できる部分がいっぱいあったのでかなり勉強になりました。
- ・今日、子育てに関する振り返りと自分自身が成長してきた中で考えさせられることがありました。コミュニケーションの大切さを感じました。
- ・他のお父さんの意見が聞いてよかった。皆同じようなことを考えていて少しホッとした。
- ・子育てについて違う世代の人と話す機会ができて嬉しかったです。
- ・体験談の2例で内容が深まりました。このような活動が地道に続けられていることに感謝します。
- ・途中からの参加で目的がはっきりと分からなく申しわけありません。当事者の方の話は良かったと思うが、なぜこの場でこの話なのかが不明だった。
- ・楽しかった。体験談が特によかった。
- ・子どもがぐずってしまいご迷惑をおかけしました。なかなか集中して参加することが出来なかったのですが、こういった機会はあまりないので参考になりました。
- ・とても良い機会でした。ありがとうございました。また参加したいと思います。
- ・子育ての振り返りができる機会って大事ですね。こんな機会に感謝！
- ・今まで話したことのないお母さんと話せてとても楽しく時間を過ごせました。また参加します。
- ・他の人の話を聞いて、色々な立場での悩みがあり大変だと思いました。人と親密になるには、本音、ある程度の境界線も必要なんだと知りました。
- ・色々な人のお話が聞いて、勉強になりました。
- ・大変勉強になりました。参考にします。
- ・コミュニティの大切さを実感しました。気楽に話をする、声をかけるだけでも自分の気持ちが楽になり、気分転換にもなりよかったと思います。
- ・いろいろな方のお話を聞いて良かったです。
- ・子育てや人生について自分以外の多くの人の意見が聞いてよかった。
- ・他の人の話から、自分の問題に新たに気付くことが出来ました。
- ・他の人の体験を聞いて安心をいただけたと思います。自分の話ばかり言ってグループの方の話が聞けなかったので聞き出すこともコミュニケーションの一つ、勉強していきたいと思いました。
- ・大変楽しい会でした。12月1日楽しみにしています。

2) プログラム 2 日目のアンケート結果

調査対象

性別	男性 8 名、女性 24 名
年齢	20 代 6 名、30 代 17 名、40 代 3 名、50 代 4 名、未回答 2 名
子どもの人数	0 人 2 名、1 人 7 名、2 人 10 名、3 人 5 名、5 人 1 名、未回答 6 名
子育て年数	1 年未満 1 名、1～3 年 3 名、4～6 年 8 名、7～9 年 6 名、10 年以上 5 名、未回答 6 名

回答結果

(キ) 前回のプログラムには参加されましたか？

(N=33)

参加した	27
参加していない	5

(ク) 今回のプログラム内容は分かりましたか？

(N=32)

大変よくわかった	15
----------	----

だいたいわかった	15
どちらともいえない	0
よくわからない	1
わからない	0
未回答	1

(ケ) 今回のプログラム内容で分かりにくいと感じた点はどこですか？

- ・ 子育てと地域の関わりを無理やり見出そうとした内容であった

(コ) 近所の人とのコミュニケーションが大切だと感じますか？

(N=32)

よく感じている	27
だいたい感じている	4
どちらともいえない	0
あまり感じない	0
全く感じない	0
未回答	1

(サ) 子育てのためにどのようなつながりがありますか？複数回答

祖父・祖母	23
友人	21
職場の人	13
幼稚園・保育園・学校 で知り合った保護者	23
近所の人	22
その他	親類、コミュニティの高齢者

(シ) このプログラムを受けて、今後子育てのためにどのような人とのつながりを意識しようと思いましたか？

- ・ 子育ての価値観が違う人とは何となく離れていたけど、もっと積極的に関わろうと思いました。
- ・ 反面教師としてプラスに活かしたり、理想（100%）ではなく少しでも関わることで子育てに役立つこともあるという気持ちで接していこうと思いました。
- ・ 色々な人と話し合う機会を親がもつことによって子どもの後姿として意識を高めていきたいです。
- ・ “我が家”だけではなく、近所や友人の考え方、対処の仕方など、知っているだけで自分（子ども）の幅が広がる…という事を知りました。
- ・ 時にはわずらわしいと思うような人との付き合いも考え方ひとつでプラスになるという事を頭に入れて対応していきたいと思いました。
- ・ とにかく知らない人でも話しかけてみる
- ・ やはり近所の人、よく会う人
- ・ 子どもを育てるにあたって家族だけで育てるのではいけない事を強く感じた。
- ・ 子どもの友人と親。子どもの好きなお店の人など。
- ・ まずは同居している義理の両親。素直にならなければと思う。近所の主婦仲間。同級生のお母さんたち。習い事の場で知り合う人たち。
- ・ 自分の子どもの友達とその保護者。学校の先生。身のまわりの地域の人。
- ・ 近所、子どもの友達の親ともっと積極的な関わりが大切だと思いました。
- ・ 保育園、住んでいるところのまわり
- ・ ご近所の方々ともっと知り合いたいなと思いました。地域の行事にも参加してみようと思います。
- ・ 子どもの友達の親や地域の人たち、近所の子どもなど
- ・ 近所の方とのつながりや保育園の保護者の方などまずは近い関係から築いていく。
- ・ 近所、知り合い限らず色々な人と。
- ・ 自分のまわりのより多い人たちとの関わり、つながりが必要

- ・ 積極的に集まり等に参加してみる
- ・ 子どもの友達の家族や地域の人と関わることで、自分1人の考えだけでなく色々な人の意見を参考にできるので色々な人と関わったが良いと思う。
- ・ なるべくたくさんの人（自分と意見が違ったりする人とも関わる）
- ・ 地域の人、自分のまわりの人
- ・ 特に今までと変わらない
- ・ 地域、地元の人とのつながり
- ・ お互いに協力、助け合っていきたいと思った
- ・ 相談できる友人や子どもの友人の親
- ・ 地域のために行動できる老人になる
- ・ 生活している場でのコミュニティで孤立しがちな方々、例えば子育て中の親御さんの子ども達など

(ス) いろいろな人とのコミュニケーションをとるための勉強会が必要だと思いますか？

(N=32)

大変そう思う	9
そう思う	18
どちらともいえない	1
あまり思わない	2
全く思わない	0
未回答	2

- ・ 人の意見や考えを聞いて気付くことがたくさんありました。
- ・ 勉強会という形式にこだわらず、コミュニケーションの場はとても必要だと思います。
- ・ 最初は自分のことを話したりするのが苦手だと思っていましたが、講師の方の話を一方的に聞くより、すごく理解できました。自分のことも少しは話せてよかったと思いました。
- ・ 人との関わりが少ない今を考えるとこういう場も必要かと思います。

(セ) このプログラムを受けてどう子育てに活かして(役立てて)いこうと思いましたか？(長門石保育園のみ)

- ・ 子どもがどんな事を思い、考えているかを分かる環境、息のつまらない環境を作ることに活かす。
- ・ 子どもの友達が遊びにきた時には遠慮しない。よく会う人には子どもといっしょに話しかけていきたい。
- ・ 自分の子どもの事でなく、子どもの友達に対しての接し方を考えた。特別扱いしなくていいという事を聞き、なるほどと思った。気が楽になりました！
- ・ いろんな人とのコミュニケーションを活かして、子どもの生活しやすい場所を作っていきたいと思いました。
- ・ 自分に子どもがいたら、子どもの友達も大切にしていこう。お客さん扱いしないというのはとてもいいことを聞いたと思いました。
- ・ わが子だけでなく我が子を取りまく環境を作ってくれている人たちとのつながりをもっと深めたい。
- ・ 目先の問題解決より幅広い意見を通しての解決をしなければ・・・と思いました。
- ・ 自分の子ども同様、周りの子どもも同じように子育てしていけたらいいなと思いました。
- ・ 困ったとき、迷ったときの選択肢を増やせるように自分から積極的に関わり合いをもっていこうと思います。
- ・ 色々な人と関わることで、色々な考え方などが分かるし、自分の中でも、色々な解決策など学ぶことができるので、関わりを大切に活かしていきたい
- ・ 自分から子ども達に話しかけていく。
- ・ 自分の子だけと思わず、他人のお子さんも自分の子と同じように気にかけてコミュニケーションをとっていきたい。
- ・ このような場にできるだけ参加したらいい
- ・ 自分の家庭だけで子育てするのも限界があると思うので、色々な地域の子どもの親と関わって知恵をもらっていけるといいなと思った。
- ・ 自分だけの意見やもの見方だけでなく、たくさんの人と関わり、自分と違った考え、意見の人もあるという事を知り、その考えを活かしていく。

- ・ 自分のまわりの人とのコミュニケーションが大切だと感じました。
- ・ 自分の考えだけでなく周りにいる人の意見をたくさん聞こうと思いました。
- ・ 困ったときはお互い様。協力し合っていきたいと思う。子どもが出来たら！
- ・ 子どもの友人とのかかわり方や家族とのかかわり方をよく聞いてみたいと思う。
- ・ 孫育ての時期です。地域と繋がっていくことが大切。次世代をつくる人たちの心が健全に育つことが必要。その手助けができればよい。
- ・ このプログラムが勉強に当たるのであれば必要だと思う。「人と関わる」「人が育つ」ということがどういうことかを考えるためにも大事であると思う。

(ソ) プログラムの感想

- ・ 参加型なので楽しかったです。ママ達だけ集まっても出ないような話題を提供してもらって、今までは出来ないような考えができてよかったです。
- ・ 子育てのつながりとして自分の友人とのつながりも必要だろうと思いますが、昔から友人との縁に恵まれていなかったので子ども達にはしっかり相談できる友人が持てる環境を作ってあげたいと思います。自分の子に限らず…。
- ・ このような会でいろんな話し合いができて楽しかったです。
- ・ なかなか機会の少ないこの様なプログラムに参加することで、周りの人の意見もそうですが、声に出すことによって自分の考えを客観的に見直すことができ良かったと思います。何気なく転がっている日常も意識して見ることができました。ありがとうございました。
- ・ 日頃の自分の考えを改めて確認することができました。気を引き締めなおして育児・育自頑張っていこうと思います。
- ・ 前回も感じたが、他のお父さん・お母さんもだいたい同じような考え、意見をもっていることで少し安心。よい事も悪いこともとにかく「話す」ということを今日は強く感じた。
- ・ お父さん、お母さんの意見をきくと勉強になります。(答えがなくても)
- ・ 正直1回目のプログラムに対しては意図するものが全く見えず疑問しか残らなかった。今回の内容は目的が明確でディスカッションでも積極的に話すことができた。地域の中で子どもを育てるという事を改めて考えた時間でした。
- ・ 今回のプログラムに参加して自分の子どもの頃の思いを思い出して、今の子ども達や近所の人とのコミュニケーションがどれだけ大切か勉強になりとても良かった。
- ・ 楽しかったです。いろんな人の意見を聞くことができて、自分の考えの幅が広がりました。このプログラムを他の所でもどんどんされていくといいと思います。
- ・ 人とのつながりと助け合いの大切さ、現代の子育て問題を実感させられました。かなりいい勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 地域とつながりが少なくなってきたと改めて実感しました。このプログラムを通して意識して人と人とのつながり、関わりを持っていきたいと思いました。
- ・ 前回に引き続き、とても楽しい時間でした。参加できてとても良かったです。
- ・ 子どもの中の近所の気ままなおばちゃんになりたいと思った。普段なかなか話さない方と話をするのがすごく楽しかったと思います。
- ・ この勉強会を受けるまであえて考えようともしていませんでしたが第一回が終わってから友人などにも話してみると、意外とみんなコミュニケーションというのを大切に思っているのもっと自分から心を開いていかなければと思いました。
- ・ これからの自分に役立てていきたいです。
- ・ 今回初めて参加して一人一人の意見が聞くことが出来て、自分と違った考え方の人もいることを知ることができました。
- ・ 色々な方の意見を聞かせて頂きそういう考え方もあるんだな…と世界が広がったように気持ちになれました。
- ・ 地域との接触が少なくなっている現在、改めて意識することになり良かったです。
- ・ 近所とのつながりが強い地域なので、当然、地域で子育てするものと思っています。
- ・ もう少ししっかりと勉強したい
- ・ 改めて人と人とのつながりは大切だなあと思った。
- ・ 色々な話を聞く場があってよかったし、そういう場があつていいと思います。
- ・ 身近にあることを掘り下げて考え、言葉に出して考えを発言できてよかった。司会者の方の運び方がよかったです。
- ・ コミュニケーションをとるための活動の場が必要と感じる。子どもが中心となった子ども達による活動・大人が楽しむ活動など

(8) AKATSUKI の紹介

新しい若者の居場所、AKATSUKI（あかつき）

【はじめに】

私達は、2001年からは、経済的価値に縛られ、機能不全に陥ってしまった「家庭」「学校」「地域」などの影響により、「心の崩壊現象」が進む現代を生きる若者の孤独や、不安など様々な生きづらさなどの諸問題を解決するための試行錯誤として、若者を「エンパワメント」するためのフリースペースや、訪問活動、就労相談、心理相談などを行って参りました。この、「新しい居場所」では、その実践の中で見えてきた、これら、若者が抱える問題への処方箋をより明確化すると、同時に、地域で、社会的活動をする人々との連携を強め、これまでの活動の統合として、既存の自助グループや、居場所では、実現出来なかった、若者の問題に関しての、社会的解決・予防に寄与し、新たな多元価値コミュニティを創造するための、挑戦をしていきたいと思えます。

【AKATSUKI とは？】

孤独を感じたり、学校や職場などに自分が合わないと感じたり、人を信用することが難しくなったり・・・そんな気持ちを抱えている人たちが、共に時を過ごし、自分と向き合うことを目的として集まる自助グループです。主な活動として居場所を開催しています。

その他の活動内容は特定していません。ここにやって来る一人一人が自分と相談しながら、仲間と相談しながら決めています。

【参加者】

引きこもり、ニート、不登校、フリーター・・・その他、会に興味がある方（年齢は問いません）なら、どなたでも結構です。

【場所・時間】

4月より、毎月第4土曜日 13時～17時、津福今町の「自立生活センター久留米」の事務所をお借りし、定例会をします。途中参加／退室は自由です。

- ・ 自立生活センター久留米 (<http://ip.tosp.co.jp/i.asp?l=furonntelia>)
- ・ AKATSUKI (<http://blog.livedoor.jp/tanimanosien/>)

【連絡先】

sahoyamato@hotmail.com

(9) ピア・サポート研修会報告書

NPO 法人 WRAP 研究会 磯田重行、坂本明子

IPS ピア・サポート研修会 報告書

〔福祉医療機構助成金事業「谷間の支援を障害者と地域の人でつくる事業」における
IPS ピア・サポート研修会の報告および今後の課題と提言〕

1. はじめに

本事業では、精神障害者当事者（以下当事者と略す）の活躍の場を作ることを目的に、とりわけ「当事者性を活かした仕事」に的を絞り、ピア・スペシャリストの研修を開催した。日本でもすでに、地域活動支援センターなどで当事者スタッフとして活躍する者も増えつつあるが、その研修制度は確立されていない。しかし自助グループのように当事者性のみでは、ピア・スペシャリストとして活躍することは出来ないと思われる。同時に、地域での精神障害者の活躍の場を考えた時、当事者間の関係性だけではなく、様々な人々との協働による地域ネットワークの形成が求められる。そこで、本事業では、①ピア・スペシャリストとしてのスキルアップ、②さまざまな人との協働による地域ネットワーク形成を視野に置いた、コミュニケーション方法に焦点を当てて IPS ピア・サポート研修会を実施した。

2. IPS ピア・サポートとは

シェリー・ミード氏が提唱するピア・サポート、IPS (Intentional Peer Support 意図を持ったピア・サポート) とは特定の目的を持って関係を結ぶための意図的なコミュニケーションのあり方、技法である。精神疾患を患った経験を持つミード氏が、ピア・スペシャリストとして、当事者をサポートしていく過程で確立されたものである。IPS の特徴は、例え当事者間であっても、援助する者から援助される者への一方通行の援助をよしとはしない点である。IPS ピア・サポートは援助ではなく、人が人をつながることを重要視し、その関係は、常に相互に学び、成長していくものであると主張する。そうした関係性こそが、ありのままのお互いを受け止め、尊重しようという当事者性を最大限に活かすピア・スペシャリストの存在価値であるという。

この主張を前提に、IPS ピア・サポート研修会では、自他それぞれの世界観を知り、双方の違いを意識したコミュニケーション方法を獲得し、関係性をケアし、人と人とのつながりを可能にする方法を学ぶ。そのため IPS では、当事者の当事者性を活かした仕事の可能性を高める手段として、さらには当事者間の関係にとどまらず、さまざまな人々が人との実りある関係の構築を試みる手法としても利用できるのである。

3. 研修会概要

日時：平成 20 年 12 月 3 日～7 日 5 日間 9 時 30 分～17 時

場所：久留米大学 御井キャンパス 学生会館

対象者：WRAP ファシリテーターもしくは WRAP クラスを受講した者で関心のある方。

参加者：23 名

地域別：東京都、佐賀県、鳥取県、兵庫県各 1 名、千葉県 3 名、京都府、愛知県各 2 名
福岡県 12 名

所属別：当事者 14 名 専門職 8 名 (Ns2 名、PSW5 名、OT2 名) 主婦 1 名 (CAP 指導者)

性別：男性 9 名、女性 14 名

年齢別：20 歳代 5 名、30 歳代 10 名、40 歳代 4 名、50 歳代 4 名

日本では IPS ピア・サポートの取り組みはまだ始まっていない。本研修受講対象者を募るにあたり、当事者に限らず、WRAP (Wellness Recovery Action Plan: 元気回復行動プラン) のファシリテーターもしくは WRAP クラスの受講を修了したもので、自分の責任の元でセルフケアを確立しているものに限った。そこで全国の本研修会対象者に対して案内をだしたところ、定員枠 20 名に対し 25 名の参加希望があった。うち 2 名が参加を

辞退し、結果、希望した全員に参加してもらった形となった。

参加状況：参加者 23 名は全日出席。

終日 5 日間というハードスケジュールにもかかわらず欠席者はなかった。最終日には若干疲れている印象はあったが、精神症状が悪化する者はなかった。

スタッフ：講師 2 名（いずれもアメリカから招聘）

研修マネジメントスタッフ 2 名（当事者 1 名、PSW1 名）

通訳 2 名（交代で依頼）

事務局スタッフ：3 名（1 日 2 名派遣）

4. 研修会内容

研修スケジュール：アメリカ人講師を 2 名招聘し、既にアメリカで確立されている IPS ピア・サポート研修会用ワークブック（日本語版）と研修会アジェンダに基づき実施した。研修アジェンダは以下の通りである。

1 日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己紹介、5 日間の概要：講義 ・ 学びを促す環境作りのための合意（約束事）：全体での意見の共有 ・ “学び” 対” 援助” 学びの関係について：全体での意見の共有 ・ “学び” 対” 援助” の違いについて：講義 ・ ピアとは何か？この関係にあなたがもたらすことの出来る資質は何か？：全体での意見の共有 ・ <u>小グループ演習</u>：写真から物語をつくる：グループワーク ・ ピア・サポートの 4 つの構成要素の概説：講義 ・ 構成要素 1：つながりについて：ファシリテーターによるロールプレイ <p>[宿題]</p> <p>ワークブックの第一章（ピア・サポートについて）を読み、次の問いに答えてください。</p> <p>質問 1：学ぶことと援助をすることの間にはどのような違いがあると思いますか？</p> <p>質問 2：いいつながりが出来ていると感じた対話を記述してください。</p>
2 日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ チェックイン ・ 約束事の見直し。今日のアジェンダ、宿題 ・ 構成要素 2：世界観の影響について意識する：全体での意見の共有 ・ 世界観について：講義 ・ <u>小グループ演習</u>：感情と症状の違いは何か？：グループワーク ・ 構成要素 3：相互性：全体での意見の共有 ・ 相互性のデモンストレーション：ファシリテーターによるロールプレイ ・ 構成要素 4：望んでいることに向かう：講義、全体での意見の共有 ・ 言葉遣いについて：講義、全体での意見の共有 ・ 二つのストーリー：全体での意見の共有 <p>[宿題]</p> <p>ワークブックの第 2 章「違った風に聴くこと」を読む</p> <p>あなたの世界観に影響を与えたと思う事柄をいくつか挙げてください。</p>
3 日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ チェックイン、今日のアジェンダ、約束事、宿題 ・ 「よく聴く」とはどういうことか？：全体での意見の共有 ・ 違ったふうに聴くこと：講義 ・ <u>個別ロールプレイ演習</u>：聴くこと：ロールプレイ ・ <u>クラスの前でのロールプレイ演習（志願者）</u>：聴くこと：ロールプレイ ・ “問題解決モード” 対” 受け止め認める発言”：講義、全体での意見の共有 ・ 違ったふうに聴くことについての自己評価：講義 ・ 家の比喩：自分の持っている視点が聴く姿勢に及ぼす影響：全体での意見の共有 ・ 聴く技法のチェックシート：講義 ・ 聴く技法のデモンストレーション：ファシリテーターによるロールプレイ ・ <u>3 人組ロールプレイ演習</u>：聴く技法の練習：ロールプレイ <p>[宿題]</p> <p>ワークブック「相互の責任」の章を読む</p> <p>WRAP で自分の責任について理解していると思います。では、あなたの生活にお</p>

	いて、相互に責任をもつやり方について考えてください。
4日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ チェックイン、アジェンダ、約束事、宿題 ・ パワー（権力）について：講義、全体での意見の共有 ・ 相互に責任をもつこと：講義 ・ 観察したこと（見たこと）と判断（評価）を加えた描写の違い：講義、全体での意見の共有 ・ 感情と必要としていることについて：講義、ファシリテーターによるロールプレイ ・ クイズ ・ 境界線について：講義 ・ 衝突の起きる状況について：講義 ・ 衝突の起きる状況—複数の真実を維持する：ファシリテーターによるロールプレイ <p>[宿題] 共同スーパービジョンの説明を読むこと ピア・サポートをとともうまく出来たと思う例と、ピア・サポートの技法を用いるのが難しかったと感じる例を挙げる。</p>
5日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ チェックイン、アジェンダ、約束事、宿題 ・ 共同スーパービジョンについて：講義、全体での意見の共有 ・ フィードバックについて：講義、全体での意見の共有 ・ 2組に分かれての演習：共同スーパービジョンの練習 ・ 最終課題であるデモンストレーションの説明と準備 ・ デモンストレーション ・ 認定証の授与

通訳を入れた研修となった。講義ではパワーポイントやビデオを使用した。また小グループによるロールプレイや意見交換が中心となり、技法の獲得と知識を深めていくものであった。また、適宜講師より、各人にきめ細やかなフィードバックも実施されていた。

5. 参加者からフィードバック

研修前の参加者の意気込み、研修会終了後、及び1ヶ月間経過した後の、自由記載による参加者のフィードバックをいくつか抜粋し、時系列的に挙げる。

研修前の参加者の意気込み：

- ・ ピア・サポートを受けることにより元気でいられるそんな利用の仕方を実践していきたい。
- ・ 地域で普通のメンバーとして暮らしていくことの意義を唱えていきたい。
- ・ WRAPの価値と倫理でいわれている「相手を尊重すること」、「一人の人をユニークな存在としてみる」、「誰かが優位ということはない」ということを実践するためにも、この研修は役に立つと思います。
- ・ 私はすぐ否定的なことを考えてしまうのですが、それは自尊心が低いからだWRAPから学びました。研修を受けて自尊心を高め、自分の考え方を変えたいと思います。
- ・ 人に惑わされるのではなく、自分らしく生きていけるようになりたいと思います。
- ・ 今回ピア・サポートの意義を捉え直して、地元での活動に活かしていきたいと考えています。
- ・ これからの人とのかかわり方でも役に立つことだと思っています。
- ・ 今まで学んできた方向とはちがう内容と、今までの方法は何かが間違っていたように感じることが明らかになる怖さを感じました。
- ・ 看護教育、不登校訪問活動、子育て、友だち、さまざまな分野で、職業的壁を越えることを目標に、今までとは違うやり方で実践していきたいと考えています。
- ・ 学ぶことで、自分を勇気づけていく力が得られるような気がしてなりません。
- ・ 私のコミュニケーションの未熟さ、問題を痛感しています。
- ・ IPSを基本から学ぶことによって、今後のWRAPの活動に生かしたい、そしてWRAPを広めたい。このことが、広く日常の活動にも大きく影響してくるものと期待して。
- ・ 一人でも多くの人に、話すことの大切さ、聴くことの大切さを伝えられたらと思っています。
- ・ この研修で出会う方々との繋がりを通して、学びの場や活用の場が広がっていくように期待しています。
- ・ 今の自分を変えたいというのが、受けた一番の理由です。
- ・ 将来、クライシスハウスのなものに関わっていきたいと考えているので、今からの指針のため

に是非学びたいと思っています。

参加者コメント（研修会終了後）

- ・ ピア・サポートにチャレンジしたいという感じがしています。
- ・ 楽しい、これからのチャレンジにワクワクしている。
- ・ これまでの自分の世界観がいい意味で変わった。
- ・ クラスの受容的な雰囲気助けられました。
- ・ 情報が多くて、頭の中がまだ整理されずにいます。
- ・ 新しい世界観、価値に触れて、圧倒されています。5日間の学びが膨大だったので、正直まだ消化しきれしていません。
- ・ 頭の中の整理がつかなくなって、少し休みたい感じがします。
- ・ 自分の世界観が変わってきているのに気が付き始めたので、頭が混乱している。
- ・ 自分のことがいろいろわかった。
- ・ 自分を見つけました。
- ・ 周りの人を少しでも、大切にしていきたいと思うようになった。
- ・ 自分の持っていた不安が、浮き彫りになったように感じました。
- ・ 相手の人との話をする中で、大切なのが「つながり」であることを学べたこと。
- ・ つながりの大切さと相互に責任を持つことの重要性。
- ・ ピア・サポートの技法を使って、コミュニケーションの幅が広がる。
- ・ 自分の感情や意見をやみくもに伝えることは危険であると思ったことは大きな収穫でした。
- ・ 今回のメンバーと定期的にフィードバックをして、日本のシステムを変えて、世界が変わる方向に進みたい。
- ・ 今の職場で、研修が終わった後、上司と交渉することがあるので、まずそこで実践したい。それからは友達や家族の間で、コミュニケーションをとる時とかに、使ってみたい。
- ・ 自分と違う、理解できないと思う人との対話がものすごく苦手。苦手な人は近付かないようにしていたが、その人の考えや気持ちを（納得がいなくても）まず聞いてみようと思っています。
- ・ バイト先の上司との会話で、意図的に実践してみようと思う。
- ・ 周囲の人が変わってもらうのを強制するのではなく、自分がまず相手を理解するよう、常に努力していきたいと思えます。
- ・ 相互性の大切さと、それを構築していくプロセスを楽しみにしている。
- ・ ファシリテーター、通訳、みんな良かった。生のロールプレイが見られたことが良かった。
- ・ 説明が分かりやすかったです、質問にも丁寧に答えていただき、理解が深まりました。
- ・ 講義だけだったら、実践するのは難しい。どのようなことを実践するのかイメージがついたので良かった。
- ・ グループに分かれてロールプレイをしたり、実演のビデオを見たりして、理論だけではなく実践の練習をしながら学べたので良かった。
- ・ お茶やお菓子はつらい時に、気持ちを安心させてくれるものでした。
- ・ わかりにくいところは共同スーパービジョンのところだった。もう少し説明が欲しかった。
- ・ グループワークの時の時間の使い方が分かりにくかった。グループメンバーの役割なども最初に割り振りがあつたら分かりやすかったのかな。
- ・ DVDを止めて、解説を入れるやり方を、多く取り入れてほしい。
- ・ 1コマが2時間の時もあつたので、休憩時間がもう少しあつたらいいなと思った。
- ・ 難しいことなので、5日間では吸収しきれないと思う。また研修を受けにきたい。
- ・ ロールプレイをもっと細かくやりたかった。時間が短いと思った。
- ・ ワークブックの全章を教えてほしいと思った。

参加者コメント（1ヶ月経過後）

- ・ いっしょに活動している人たちと、お互いに自然体でいられる関係になっていることに気づきました。
- ・ 相互に責任をもつということを学んで、WRAPの「安心の同意」の奥深さに改めて気付いた。
- ・ まだまだピア・サポートについて勉強不足なので新たに気付くことがないのかもしれませんが。
- ・ IPS ピア・サポートを実践してみて自分の世界観が以前よりも、少しずつではありますが、広

がりつつあると思います。

- ・まず気持ちを「前に向かわせる」ことが大切で、自分の課題であると感じました。
- ・WRAPのときもそうでしたが、研修を受けただけではまだまだ理解していないところも多く、これからIPSを人に伝え、学び合う中で多くの気づきが出てくるのだろうな、と感じています。
- ・いかに自分がなにげない会話に気を配っていなかったか気づきました。
- ・今まで人と関係性を築くことが苦手でしたが、研修のおかげで少し自信が持てました。
- ・誰と話をするのも楽になった。特に、苦手な人、自分と意見が合わない人と。
- ・定期的に研修を受けた仲間とフィードバックをしていきたいと思っています。

6 おわりに

本事業では、日本で初めてIPSピア・サポート研修会を実施した。参加者のコメントを中心に、本研修会の意義と今後の課題をまとめたい。まず、本研修会の意義であるが、参加者の多くは、生き生きとした表情で、研修会を受講し終えた喜びを語っていた。当事者にとって、本研修会を受講し終えたこと、そしてこの研修会での体験が、達成感、自信、自己肯定感、自己受容につながったようである。

また新しい、実りのある学びができ、ピア・サポートを实践したい気持ちが高まっている者も少なくないように思われた。実践に不安を語る者がいないわけではないが、当事者がピア・スペシャリストとして活躍するためのスキルアップの研修としては、意義があったように思われた。さらに、苦手な人とも関係を持ちたい、当事者以外の者からも職場で実践してみたいという感想もあり、当事者間に留まらない、人と人とのつながりへの期待も感じる事ができた。

一方で課題もある。まず、すでにアメリカで確立されているとはいえ、今後日本で本研修会を実施していくためには、研修会の内容、時間の配分など研修会の構造に、検討の余地が残ると思われた。次に密度の濃い研修会であったとはいえ、一度の研修会で得た知識の獲得には限界がある。実際、参加者にも、IPSを实践したいと思うものの、一度の研修でIPSピア・サポートを实践していくことに不安を語る者、大量の情報を消化しきれず困惑する者もいた。研修会終了1ヵ月後のコメントからは、IPSが実際の生活の中で、自己及び他者との関係性に、よりよい気づきを促しつつも、具体的な実践ができずにいる様子が伺える。参加者がおかれている環境も考慮していく必要はあるが、さらに知識、技法を獲得していく研修の機会など、フォローアップを継続して行うことが、今後の課題といえよう。

最後に、精神科の病気に罹患することで、挫折感、喪失感、あるいは孤独感などを体験した当事者が、回復を語る時、誰もが自分をありのままに受け止めてもらえる仲間の存在の大きさをあげる。研修会中、参加者同士が、協力し合って課題を達成し、共に支えあい、学ぶ姿が見られ、最後には情報交換のためにグループメールの提案が行われた。このように、研修会を通して、様々な人で成り立つ、より強いネットワークを形成できたことは、今後の地域ネットワークを考えていく上で、何よりの収穫であったように思う。

(10) 最終報告会の配布資料

平成20年度 独立行政法人 福祉医療機構 助成金事業
「谷間の支援を障害者や地域の人でつくる事業」 研究報告会

一緒に考えてみませんか！
新しい支えあい

平成21年3月1日(日)

社会福祉法人 拓く

1. 現状の認識

- 超少子高齢化社会
 - 人口バランスの崩壊
 - 支える人が減少・負担増、認知症など支えが必要な人が急増

人口(年齢階級別) ※年齢階級は、0歳～100歳以上の1歳さざみとなっている。
〈出典: 総務省統計局「国勢調査報告」, 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成18年12月推計・出生中位・死亡中位)」

1. 現状の認識

■ 生きづらい社会

- 経済成長に伴う社会の変容
 - グローバル化、男女不平等、スピード化、24時間営業、不安定雇用、個人主義、核家族化など
- 人と人のつながりが分断され、コミュニティや共同体が薄れている。



孤立しやすい環境 ⇒ 生きづらさを抱えやすい

- 引きこもり : 全国に約200万人
- 自殺 : 11年連続 3万人を超す(※ 交通事故死亡者数の5倍)
- 不登校 : 全国に約13万人
- 児童虐待 : 推定で約12万人
- DV : 4人に1人

制度の谷間で支援を必要とする人は急増

3

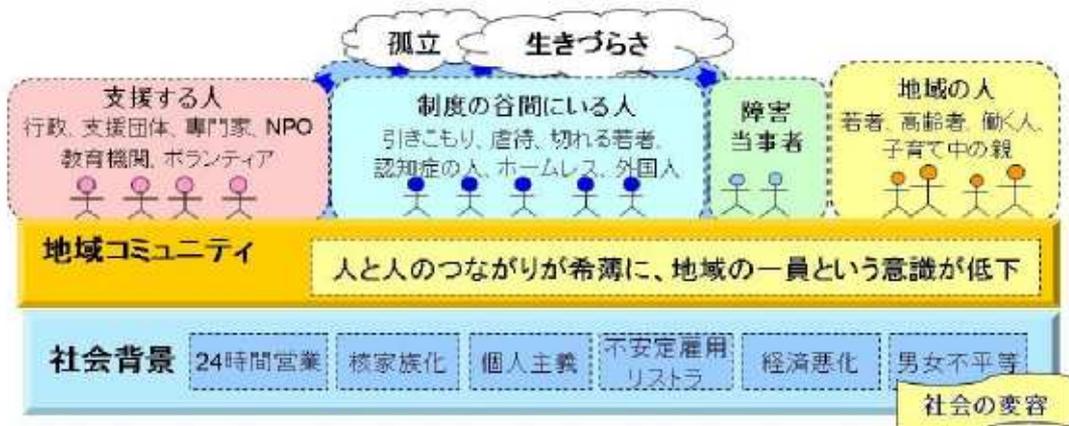
1. 現状の認識



高齢者を含め、支援を必要とする人が圧倒的に多くなっている
一部の支援者・専門家だけでは対応できなくなる。

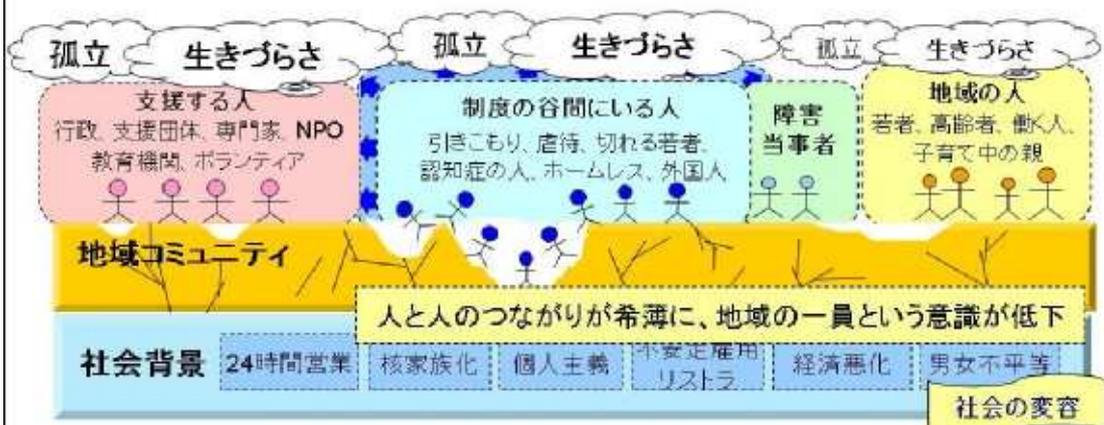
4

2. 谷間の支援の課題



5

2. 谷間の支援の課題



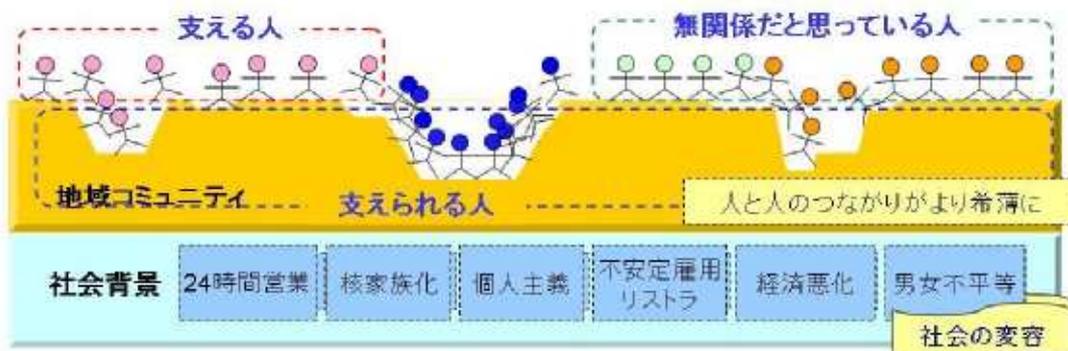
「生きづらさ」「孤立」を抱えているのは、子育てをしている人、働いている人、高齢者も同じで、
実は今は関係ないと思っている(これから直面するであろう)私たちみんなの問題である。

同じ社会背景、地域コミュニティの上に暮らしている
すべての人にとって「地続きに一緒の問題」である

6

2. 谷間の支援の課題

超少子高齢化社会、生きづらい社会は、今後もその傾向は強まる



いつ支えられる側に立つか分からない！

しかし

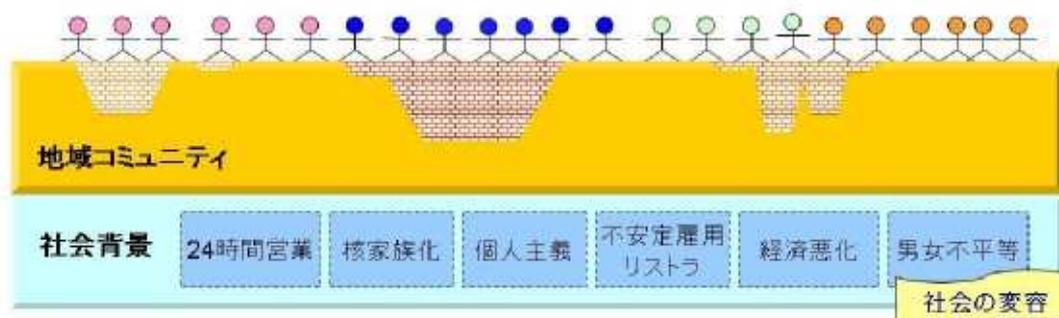
問題が一部の人のにとどまっており、社会化されておらず、支援の輪が広がっていない

- ほとんどの人が無関心、その人の問題だと片付ける。
- 支援者は、自分たちの活動で精一杯で、他との協働までは至っていない。

7

3. 事業の目的

「新しいコミュニティ」をつくり、支えあう

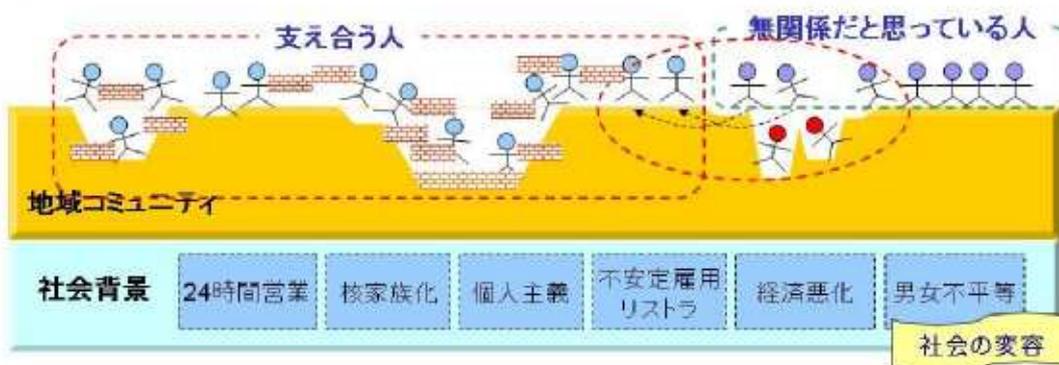


8

4. 新しいコミュニティづくりの視点

【新しいコミュニティの視点】

- ① 世代、障害の有無、文化の違いを受け入れる
- ② 支援される側と考えられている人たちが支える側にもなる
- ③ 高齢者、障害者、問題を抱えた子どもが地域の人をつなぐ
- ④ 地域住民は力を持っている

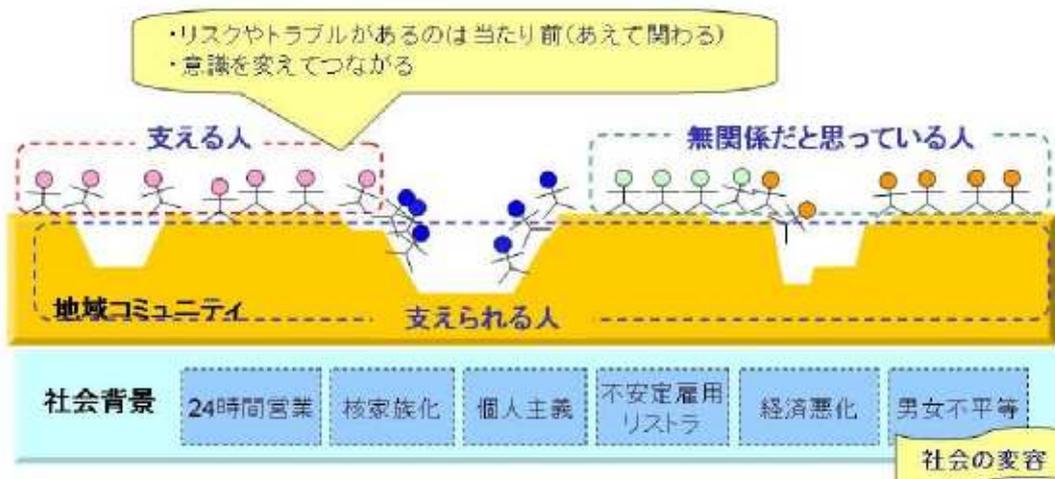


9

4. 新しいコミュニティづくりの視点

① 世代、障害の有無、文化の違いを受け入れる

- ・ コミュニティづくり(人間関係)は違いを認めることから始まる。

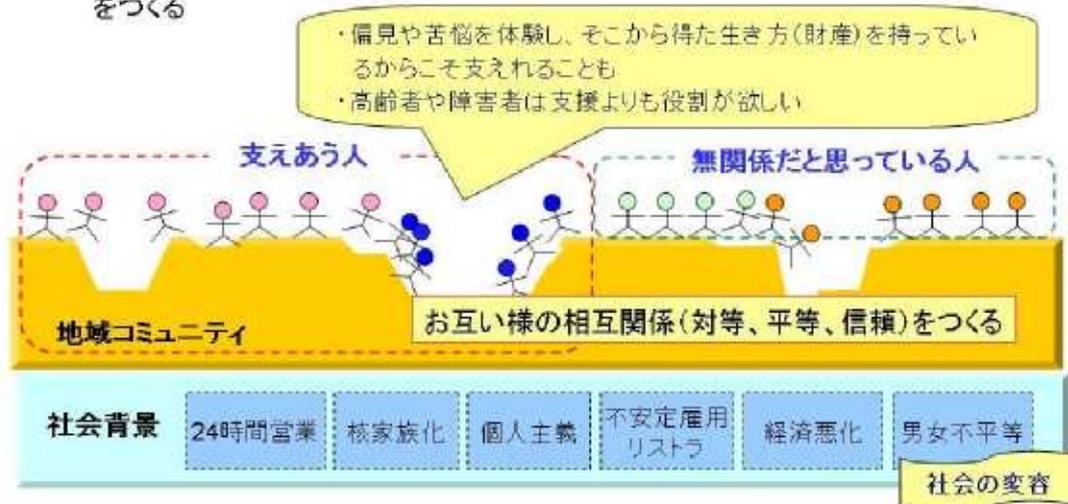


10

4. 新しいコミュニティづくりの視点

② 支援される側と考えられている人たちが支える側にもなる

- ・ 高齢者、障害者、生きづらさを抱えている人(経験した人)たちこそ支援できることも
- ・ 支える側/支えられる側の一方的な関係ではなく、支え合う・お互い様の相互関係をつくる

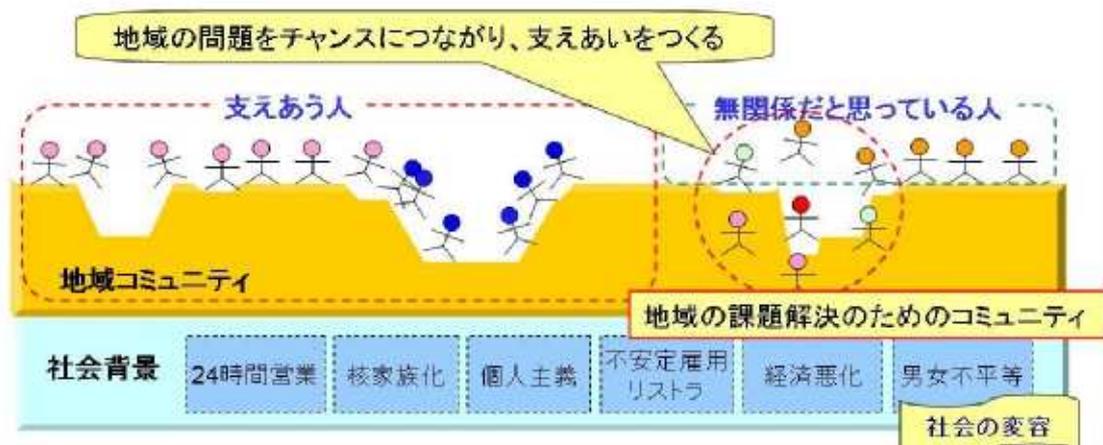


11

4. 新しいコミュニティづくりの視点

③ 高齢者、障害者、問題を抱えた子どもが地域の人をつなぐ

- ・ 地域の課題だと考えられている人が新しいコミュニティづくりの基点になる

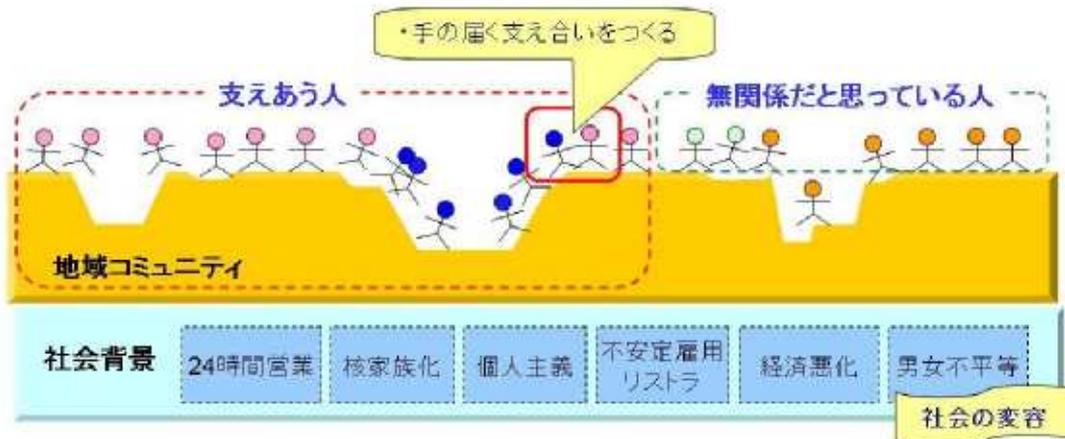


12

4. 新しいコミュニティづくりの視点

④ 地域住民は力を持っている

- 住民の支えあえる力を見出し、強化していく。
- 手の届く支え合いは、近くの住民しかできない。



13

5. 実施内容

- 異領域とのコラボレーション(協力、協調、共同)
 - 事業推進委員会、ホームレス支援、国際交流、デートDVフォーラム
 - 働く男女のエンパワメント・カフェの共催
- 地域コミュニティの必要性を啓発する
 - 就学前の保護者のための自立と共生プログラムの開発
- 地域の支えあいの場をつくる
 - 小規模多機能「三原さん家」
 - 小規模多機能「下宿屋 南の家 ほっと」
- 当事者が主体となり「つながる」
 - 引きこもり支援
 - ピア・サポート研修
 - 当事者が地域で体験を話していく

14

5. 実施内容(異領域とのコラボレーション)

■ 事業推進委員会

- 久留米を中心とした異領域の団体があえてつながる場をつくった。
 - 行政、教育委員会、福祉・医療関係者、当事者、ボランティア、NPO、児童民生委員等
- 意見交換、シンポジウムなど行い、多角的な視点から谷間の支援について考え、事業を推進した。

【実績】

2008年4～2月 3回 延べ人数 135人

- ・事業推進委員 36名



第1回 事業推進委員会 意見交換



第3回 事業推進委員会 シンポジウム

15

5. 実施内容(異領域とのコラボレーション)

■ ホームレス支援+ (精神障害者、福祉事業者)

- 公園での炊き出し、設営、訪問活動や会議などに精神障害者や福祉事業者が参加。
- 精神障害者は「支援する」という役割ができたことでエンパワメントされた。
- ホームレス支援者は、交流したことで精神障害の問題を知ることができた。
- 今では精神障害者が自主的にホームレス支援に参加している。

【実績】

2008年4月～2月までの全40回 延べ人数 103人

- ・定例会議 9回・・・14人
- ・自立支援部会議 3回・・・5人
- ・炊き出し(毎週火曜日) 25回・・・78人
- ・訪問活動 3回・・・6人



公園での炊き出し

■ 国際交流+ (身体・精神障害者、福祉事業者)

- お互いの活動の情報を交換し、今後の協働について検討した。
- 国際交流の「Myはし作り」などの活動に精神障害者の人が参加。

【実績】

2008年8月～2月までの全3回 延べ人数20人

16

5. 実施内容(異領域とのコラボレーション)

■ 虐待防止団体+(精神障害者、中高生、福祉・教育関係者)

- デートDVフォーラムの共催。
- 虐待防止3団体がつくったデートDV防止プログラムの検証。
- 多角的な視点からプログラムを検証することができた。
- 精神障害者、中高生、福祉・教育関係者はデートDV問題を知ることができた。

【実績】

2008年10月5日 1回 延べ人数 99人



様々な立場の人が一緒にプログラムを検証

17

5. 実施内容(異領域とのコラボレーション)

■ 働く男女のエンパワメント・カフェの共催

- 「働きづらさ」や「生きづらさ」をテーマとして、働いている人、障害当事者など様々な立場の人が集まり、就労環境を考える場をつくった。
- 働きづらさはみんな同じ。様々な人の意見を聞く中で、働く場(会社)が、生産性・効率性を優先するあまり、一人ひとりが孤立化、時間的・身体的・精神的な制約のある人が適用しにくい現状が浮かび上がった。
- 制約のある人も社会へ参画できるような、分かち合いの制度や支え合いの意識が必要である。

【推進メンバー】

ル・バトー(子育て支援)、男女雇用推進センター、身体・精神障害者、福祉事業者、働いている人

18

5. 実施内容(異領域とのコラボレーション)

【実績】

2008年4月～2月までの全40回 延べ人数 220人

- 6月26日(木) 働くなってなんだ
- 7月25日(金) 単身家庭(だけじゃない!)の労働問題 ～子育て・介護は誰がする?～
- 10月17日(金) 若年層(ロストジェネレーション)の就労問題
- 11月28日(金) 久留米の労働環境について ～パネラーによるディスカッション～
- 1月23日(水) 経営者の視点「働くこと」を考える
- 2月27日(水) 他国と比べる労働環境 ～ドイツやデンマーク、オランダなどの取り組み～



若年層(ロストジェネレーション)の就労問題



久留米の労働環境について

19

5. 実施内容(地域コミュニティの必要性を啓発する)

■ 就学前の保護者のための自立と共生プログラムの開発

- 子育てに地域コミュニティの必要性を啓発するため、保護者のための自立と共生のプログラムを開発した。
- プログラム開発するにあたっては次世代育成や孤立しない子育ての環境のあり方について、様々な立場・子育て中の親を交え共に考えた。
- 保育園・幼稚園でプログラムを試行した。
 - 子育てに地域コミュニティが必要だということを認識してもらうことができた。
 - プログラムに対するニーズと有効性を検証することができた。

【プログラム開発委員】

CAP、久留米市役所、教育委員会、児童民生委員、主婦、精神・身体障害当事者、保育園・幼稚園関係者、福祉事業所

【実績】

2008年4月～2月までの全7回 延べ人数96人

- 7月10日(木) 開発委員会：子育てについての問題と課題を出しあう
- 7月24日(木) 開発委員会：プログラム案の検討
- 8月 7日(木) 開発委員会：プログラムのデモンストレーションおよび検証
- 11月12日(水) プログラム試行：1日目@天心幼稚園
- 11月20日(木) プログラム試行：1日目@長門石保育園
- 12月 1日(月) プログラム試行：2日目@天心幼稚園
- 1月15日(木) プログラム試行：2日目@長門石保育園

20

5. 実施内容(地域コミュニティの必要性を啓発する)

【プログラム概要】

- 対象者 : 就学前の子どもを持つ保護者を対象
 参加者 : 64名(長門石保育園 46名、天心幼稚園 18名)
 時間 : 100分×2日間
 内容 : 様々なシチュエーションについてワークショップ形式で語り合い、子育てと地域コミュニティについて考える。



21

5. 実施内容(地域の支えあいの場をつくる)

■ 小規模多機能「三原さん家」

- 近くの地域の人々が持つ支え合いの力を借りて、様々な人が共に生活する場をつくる。3月に完成予定。
- もともと地域の人の溜り場であるところに、支えあいの機能を追加



誰でも、世代、障害の有無、文化を問わず気軽に集え、助け合おうという気持ちが持てる場所をつくる。

『地域住民が生かすコミュニティづくり』



22

5. 実施内容(地域の支えあいの場をつくる)

■ 小規模多機能「下宿屋 南の家 ほっと」

- 障害者がつなげたコミュニティ
 - 地域の一軒家を借り、世代、障害の有無、文化を問わず集える小規模多機能「下宿屋 南の家 ほっと」をつくった。
 - 現在、2名の知的障害者が親元を離れ、支援を受けながら暮らしている。
- 支援者として、近所の住民が障害者の地域での暮らしを支えている。



『地域住民が生かすコミュニティづくり』

23

5. 実施内容(当事者が主体となり「つながる」)

■ 当事者が主体の引きこもり支援

- 毎回、様々な生きづらさをテーマとして語り合う。率直に話し合い、お互い問題を分かち合うことで信頼関係を築くことができた。
- 新しい若者の居場所「AKATUKI」を開設した。引きこもり当事者、身体・精神障害者、福祉事業者が携わった。
- 引きこもり当事者による引きこもりをテーマとしたリレー小説の執筆、福岡県に引きこもり支援センター設立を要望するなど、当事者が主体的に新たな活動を展開していく

【実績】

2008年6月～2月までの全15回 延べ人数 190人

・毎月第2水曜(えーるピア久留米) (6月までは毎週水曜日)



様々なテーマについて語り合う



リレー小説をホームページで公開
(<http://blog.livedoor.jp/tanimanosien/>)

24

5. 実施内容(当事者が主体となり「つながる」)

■ ピア・サポート研修

- アメリカで先駆的に行われている、当事者による関係性づくりを学ぶ研修会を、講師を招いて日本で行った。
- 研修では、自分の体験が他者の体験に役立つことに気づき、自分の価値を見出し、自信をつける。同じ体験を持っていても、それぞれの違いがあり、その違いを分かりあいながら、関係性をつくっていくことをロールプレイ等を通して学んだ。
- これから当事者がつながっていく基礎をつくることができた。

【推進メンバー】

WRAP研究会、精神障害者、福祉事業所

【実績】

2008年12月3～7日 5日間 延べ人数125人
研修受講生 23人

25

5. 実施内容(当事者が主体となり「つながる」)

【研修内容】

日 時：12月3日～7日(5日間)

講 師：ジェリー・ミード氏、クリス・ハンセン氏

参加者：23名

- 内 容：
- ・意図的なピアサポートとは
 - ・4つの課題について
 - ①つながり、②世界観、
 - ③相互性・お互いに責任を持つこと、
 - ④「向かうこと」対「避けること」
 - ・お互いに責任をもつ関係の練習
 - ・衝突のおきる状況
 - ・共同スーパービジョン



ロールプレイを中心とした体感型の研修

26

5. 実施内容(当事者が主体となり「つながる」)

■ 当事者が地域で体験を話していく

- 当事者が、自らの体験談を話し、人と関わることで障害を乗り越えれたことや人とつながることの重要性を伝えた。
- 当事者が地域で自らを発信していくことで、地域で同じように悩んでいる人とつながる機会ができた。

【実績】

- ・小学校の懇談会(PTA対象)
- ・小学校交流(小学生向け対象)
- ・地域校区の集会(校区の住民対象)
- ・地域の井戸端会議



地域校区の集会での内容

- 自身の発病から今までの話。
- 精神的な病気になったことが辛いのではなく、理解されず孤立することが辛かった。
- 回復するには仲間(人とのつながり)が大切。
- 同じ校区に同じような悩みを持つ人の相談にのる事ができる。
- 集会後、地域の人が駆け寄る姿があった。

地域校区の集会200名以上の人の前で話した

27

6. 成果および成果物

■ 異領域とのコラボレーション

- あえてつながる機会をつかった。
- 相互の問題や課題を知ることができた。新たなつながりが生まれた。

■ 地域コミュニティの必要性を啓発するツールができた

- 就業前の子どもを持つ保護者のための自立と共生プログラム

■ 地域の支え合いの場ができた

- 住民の力を生かした小規模多機能「三原さん家」、「下宿屋 南の家 ほっと」

■ 当事者が主体となり「つながる」ことができた

- 若者の新しい居場所「AKATUKI」を開設。
- ピア・サポート研修。「コミュニティづくりの基礎」について学んだ。
- 当事者が地域で自らを発信していくことで、地域で同じように悩んでいる人とつながる機会ができた。

4つの視点から地域コミュニティづくりを考えたことで、今までにない新しい支えあいをつくることができた。

28

6. 成果および成果物

- 事業推進委員の方々の情報を掲載するホームページ
 - 携帯を使って簡単検索(配布資料にQRコード)
- 就業前の子どもを持つ保護者のための自立と共生プログラム
- 引きこもり当事者によるリレー小説
- 「新しいコミュニティづくり」の小冊子(配布資料)
- 新しいコミュニティづくりのモデル(ビデオ)
 - 「住民の力を生かすコミュニティづくり」
 - 「障害者や子どもがつなぐコミュニティづくり」
 - 「引きこもり当事者のメッセージが発信されるコミュニティ」



29

7. 今後の課題



30

(11) 最終報告会のアンケート結果

(a) 調査対象

性別	男性 19 名、女性 38 名、未回答 14 名
年齢	20 代 5 名、30 代 5 名、40 代 18 名、50 代 29 名、60 代 10 名、70 代 4 名
所属	会社員 2 名、学生 1 名、福祉関係 26 名、医療従事者 3 名、教育関係 6 名、行政 4 名、主婦 10 名、自営業 2 名、無職 5 名、その他 6 名、無回答 6 名 ※谷間の支援を必要とする当事者 2 名、そのご家族 3 名 ※障害当事者 5 名、そのご家族 5 名

(b) 回答結果

(タ) 今日の研究報告会はどうでしたか？

(N=71)

大変よかった	24
よかった	36
普通	5
あまりよくなかった	0
よくなかった	1
未回答	5

- ・ 地域やコミュニティで支えあうことは重要なことだと思った。障害者が住みやすい地域作りや支え合いを作っていくことが大事だと思うが、障害者一人ひとりに対する個別的な支援も必要だと思う。
- ・ もっと時間があって、一人一人のお話をもっと聞きたかった。楽しい、良い時間だったと思います。
- ・ シンポジウム②当事者の方の声に実感がこもっていた。当事者でなければ分からないことがあります。当事者の気持ちを（声を）聞くことが大事なのかと思う。
- ・ 楽しく勉強できました
- ・ いろいろな方面の方のお話がきけて良かったです。
- ・ 大変考えさせられました。ありがとうございました。
- ・ 余り幅広い視点があり理解がぼやけてしまいました。
- ・ 地域で近所の子たちにもっと自分にできた事があったのでは。それは自分の子にも返って後悔する事が多いです。これからの自分は変わりたいと思いました。
- ・ いろいろな立場の方々が集まり支援のあり方としてコミュニティの大切さを実感しました。
- ・ シンポジウム①について、何を参加者（話を聴いている人）に伝えたいのかわからないし、発言者やパネリストが多すぎて事前の打合せを十分にされていないので、まとまりもない報告になっていませんか？シンポジウム②はとても良い話だったのに、シンポ①終了後になんかの人が帰っていました。シンポ①の司会者の進行能力不足があるのでは？主催者はもう少し参加者の立場にたって内容を考えて下さい。
- ・ 当事者やその家族からの話が聞けたのが良かった
- ・ 昨日、知り合いの人に「良かったら行ってみたら？」と声をかけられて来ました。正直そんなに期待していなかったのですが、来てみてよかったと思いました。久留米はこういう事業にとっても力を入れているのだととてもびっくりしました。
- ・ こんなにコミュニティの事を考えた時間は生まれて初めてでした。
- ・ 試し事業の研究報告会で常に終了するのではなく、これからはつながるものでないといけないと思います。”ここからがスタート地点で有る”でなければやりっ放しの事業になります。期待しています。
- ・ 中村さんの話が良かったです。参考になります。（他の皆さんの話もちろん良かったです）親世代の意識改革からしないと変えていくのは難しいかもしれませんね。
- ・ 淡々と流れるだけでポイントが弱まってしまったように思います。時間を短くし内容を濃く

した方が訴えるものがあつたか？と思います。

- ・ あまりにも時間が足りない。話の中で馬場さんという方の名前が出たがどうかかわりの方か知りたかった。内容的に密度が濃く良く理解できた。民生委員としては今まで高齢者や児童に多く関わるが障害者にはほとんど知識がなかった。
- ・ 拓く^①の志の高さに感動します。
- ・ 各立場の人の意見がかみ合っているとは思わなかったが、このような会そのものが開かれることに意義があるのだろう。
- ・ シンポ①多方面の内容の極めて濃い内容の報告を理解するのが精一杯だった。得たものは大きかった。続けて考えてゆきたい。
- ・ 一人で生きていくのではなく、共に生きる”共生”で仲間と共に他の皆さんの助けも借りて人生を過ごすこと。
- ・ もう少し深めた意見、正直な意見が出せたらよかったと思う。
- ・ 古川さんが言われるように”個人の自由”、高すぎる”人権”意識がコミュニティ作りの弊害になっているのではないかと思います。色々な立場の方を集めて報告会をしたその過程にもとても意義があつたのではないのでしょうか。お疲れ様でした。
- ・ 多様なセクターの方々のお話が聞けたことが参考となりよかったと感じています。第1部の時間（1人1人のスピーチの）が少し長かったかなと思います。
- ・ 地域社会のつながりの大切さを再認識しました。
- ・ 他の多方面からの立場のお話がきけてとても勉強になりました。
- ・ これからのコミュニティがいかにかみあうか答えはなかなか出ません。
- ・ 中村さんの話が良かった。共感しました。
- ・ マイテーマ（コミュニティの再生）と重なったので勉強になりました。
- ・ シンポジウム②では共感できる内容が多くあり楽しくきくことができました。当事者や色々な立場の方のお話がきけてよかったです。
- ・ 多方面の方々のお話が聞いて久留米の皆さんの”考える”キッカケになったと思います。キーワードは”地域”ですね。この事業のモデルが久留米の町々に広がることを願っています。
- ・ 自分が感じていたことをパネリストの人が発表して頂いたのでうれしかったです。
- ・ 内容は充実したもので大変面白かったです。ただ時間が長すぎて疲れました。
- ・ 何も考えず過している毎日で、人の話を聞 少しでも考えて見る。でもまだいろいろわからないが、こういう場所で話を聞くことがあれば、人の考えを聞いて自分が少しでも変わっていくであろうと思いました。ありがとうございました。
- ・ 引きこもりの人との接し方を学ぶことが出来た。知り合いにリストラに合い引きこもりになった人がいるため気になっていたの…。
- ・ 地域の再生について色々な視点から考えることができました。
- ・ 現状を学ぶことができよかったです。
- ・ 精神障害者をバカにした出来事の何が面白い?!もっと当事者を中心にしたディスカッション（質疑応答）の時間が欲しかった。制度的に良い拠点は人が出入りし、常に”職員”が常在している所。…というのはおかしい。”当事者には能力がなく、危険”という思い込みや偏見を政治家を始めとする行政が持っている認識である限り、これからも日本の福祉に発展の期待は一切持てない。
- ・ 感覚的にはバラバラになっている会（コミュニティ、集まり）は、色々な問題の解決をはかる中で結びついていかなければならないのではと感じていたの、そのことが間違いないと確認できたと思います。実際、色々な試みがなされていることを知り少し驚きました。
- ・ 社会の健全者にはなかなかかわかってもらえない人が多くいると思ひ積極的に話を当事者にきいてもらいたい。
- ・ 主任児童委員の話、児童と地域とのつながり、福祉と地域とのコミュニティ
- ・ 現在の地域コミュニティ関係者（まちづくりや自治会等）との関係がよく分からない。何故今日参画がなかったのか。新たなコミュニティは現存するコミュニティとどう、どうやって関わっていききたいの 焦点がブレたように感ずる。

(チ) 報告会に参加する前と終了後の意識の変化についてお尋ねします。

(1) 新たな支えあいの必要性について

(N=71)

わからなくなった	0
変わらない	4
少し認識できた	15
認識できた	37

かなり認識できた	11
未回答	4

(2) コミュニティづくりへの参加意識について

(N=71)

気持ちがなくなった	0
変わらない	5
少し高まった	24
高まった	25
かなり高まった	12
未回答	5

(ツ) 新たな支えあいのために、これからどんなことをしようと思いますか？

- ・ 障害を克服すること、精神障害者が働きやすい社会になるために精神障害者でも労働力になるということをもっと分かってもらい、障害者への偏見や差別がもっとなくなるような社会作り
- ・ 地域の集まりに参加します。
- ・ 自分のできる事を考え、高められるコミュニティに参加していきたいです。
- ・ 外国籍の保護者の子育て支援を考えています。「孤立させない」よう努力していきたいと思ひます。
- ・ 友だちとの支えあいを続けていくこと。少しずつ。
- ・ 子育て支援のようなことを将来やってみたいです。経験を生かして子育て中の困ったところの支えをしたいと思ひます。独り暮らしのお年寄りの新聞など廃品回収など手伝ってあげようと思ひます。
- ・ 機会があるたびに参加したいと思ひます。自分にできる事を捜していきます。
- ・ 自分も支援を必要とする部分もあると思ひますが、自分に出来る事も何かあると思うので気負わない程度で今自分に出来る事をしたい。そのために、少し勇気を出して行動を起こしたい。久留米で生活を始めてまだ三ヶ月弱です。知り合いも少なく孤独を感じていますので人との交流が必要だと思ひています。
- ・ 地域の行事に積極的に参加する。(声かけ支え合いが大切)
- ・ 子育てサークルをしています。近くのお母さん同士を紹介しあって小さなつながりを作っていくと同時に、今子育て中のお母さん達と地域のおじさん？おばさん(民生委員さんとか)ボランティアをつなげていきたいです。小さなことからつながろう！きっと大きな力になるはず。職場では障害者の方の為のオープンスペースがあります。でも利用者の方々と仕事ではなく、休館日に自宅でバーベキューしたり、夜に飲みに行ったり自然な付き合いをしたい(友達として!!)今もやっていますが、楽しいです、支えられています。
- ・ ずっと”新たな支えあい”は必要と感じていましたし、”コミュニティづくり”も必要と思ひ、試行錯誤を繰り返してきましたが、今は参加することで目標が定まってきたように思ひます。福祉関係の働きを進めたいと思ひます。
- ・ ポレポレのフォーラムに参加したいと思ひた。
- ・ 先ず身近な所とのコミュニケーション、隣組の親睦から始めたい。
- ・ 理解と声かけをしたいと思ひます。
- ・ 先ずは近隣の人との関係を深めたい。
- ・ 現在の立場の中で(民生委員)、今日目を開かされたことについて、引き続き考えてゆき、実践も少しでもできるようになってゆきたい。
- ・ アサーションの勉強、言葉づかい、気づかいを日本人がもっと上手にならなくてはと思う。みんな国会答弁になっている。
- ・ 小さな地域で顔が見える連携作りを進めていきたい。誰に相談してよいか分からない人達の支えになっていけたらと思う。
- ・ 地域の婦人会連絡協議会に参加していますが、「あー、嫌だな」と思ひ時もあったのですが、このつながりを大切にしたいと思ひます。
- ・ 丁度、地域で支えあいの小さなサークルを作りたいと思ひていましたので、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 困っているかな？と思ひたら声に出して行動してみようと思ひました。少しでも支えあえたら、そこから広がっていくんだと思ひました。
- ・ いろいろな立場でやれる事がたくさんあるんですね。仕事じゃなくて生活の中で見えてなか

った事があったな。しっかり持ち帰って仲間にも伝えていきたいです。ありがとうございました。

- ・ 地域での協力がとても大事です。
- ・ 地域の人と
- ・ 地域コミュニティの最前線は地域のコミュニティセンターと思いますが、まずその機能がバリアフリーでないと。自助、共助、公助を地域でももっと深め話し合うべき。
- ・ 人との出会いを大切にしたい。
- ・ 校区コミセンでのベースをしっかりと作っていききたい。(ボランティアの構築、プラットホームの活性化)
- ・ 講演会などに参加しようと思いました。
- ・ まずは”子ども会”に積極的に参加し、地域と付き合ってみます！！
- ・ 今身近にいる人と深くつながる。いろんな分野の人と出会い関係を深める。
- ・ 自分の仕事の中で出来る事をしていきたい。
- ・ 民生委員や病院でボランティアをしている中で色々な人と関わる事が有るので相手の気持ちを受けとる事が出来そう。
- ・ 保育園園長です。地域の大人を引き込んだり、地域の行事に参加したり繋がっていききたい。
- ・ 福祉支援だけでは難しい現状だから地域支援が必要なのでしょうか？人としての根本的な事が不足してきた世の中というより豊かになりすぎ自己中心的になってきている様に思います。まずは地域や障害者他関心を持てる場が必要だと思います。
- ・ フリーダムで将来オープンスペースを開きたいと思っています。馬場サンに”谷間の支援”の仲間に入れて頂きありがたく思っています。これからも頑張っていきますので、何かあればいつでも声をかけて下さい。行政の人間は障害者を能力のない(低い)人間とキメ付け、上から目線でしか見ておらず、基本は”現場でなくデータ”になりがちである。
- ・ とりあえず色々な集まりに顔を出して理解を深めることから始めようと思います。
- ・ 意識の改革の必要ではないのか思えてしょうがない。
- ・ 福祉問題、児童、高齢者、障害者とのコミュニケーション作っていききたい。
- ・ 民生委員、児童委員の一員として地域の様々な方々に「そっと寄り添う！」よう常に心がけて活動を進めてまいりたいと思っています。
- ・ 今日参画した各団体は自ら地域の中でどう連携アピールしていきたいと考えているのか、当事者同士の結びつきは強くなっても地域の中では？地域への市社協や行政の働きかけがこれまで非常に薄かった。今はどちらかといえば行政サービスとの結びつきは濃くなったかもしれないが、そのことがかえって地域での支えあいを希薄にしたのでは。サービスと地域の支えあいがうまく統合するような意識改革が必要。何故生きづらいのか社会の受け入れが出来てない。

(12) 事業推進委員ネットワークの活用

目的

本プロジェクトで構築した多分野に渡る事業推進委員会のネットワークは、久留米地区の谷間の支援を展開するにあたって、有効な資源であり、今後とも有効活用できるのではないかと考えられる。そこで、有効活用の方法として、インターネットに事業推進員の情報をホームページ (http://www.h-polepole.com/mobile/tanima_network/index.html) として公開し、誰でもそのページにアクセスができるようにする。

機能

- 生きづらさをキーワードに検索できる

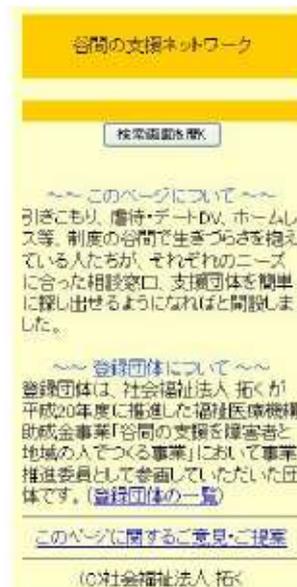
「引きこもり」「虐待・デートDV」「自殺」「切れる」のような生きづらさをキーワードとし、相談窓口を検索できるような機能を備える。



※ 生きづらさに該当する問い合わせ先が表示される。

- 簡単にアクセスできる

誰でも簡単にページにアクセスできるように、携帯電話閲覧用のQRコード(2次元バーコード)を活用する。ホームページへのアクセス手順を以下に示す。



情報公開シート

ホームページで公開する情報は、以下の情報公開シートを基に調査した。

情報公開シート

(1) ホームページに情報を公開しますか? (はい) ・ (いいえ)

上記(1)で「はい」と答えた方は以下(2)、(3)にご記入下さい。

(2) 問い合わせ先情報

名 称	
種別	行政 / 福祉 / NPO・ボランティア / 当事者団体 / 個人 / その他 ()
住所	
代表者名	
電話番号	
FAX 番号	
E-mail アドレス	
ホームページ	
紹介文 (100字以内)	

(3) 相談対応の可否

対応可能	時間	制限なし ・ ____時__分～____時__分
	日	制限なし ・ 月 火 水 木 金 土 日 祝日

生活課題	相談対応の可否
引きこもり	
虐待 (DV) ・ デート DV	
自殺	
切れる	
ホームレス	
その他 ()	

(13) 新しいコミュニティづくり

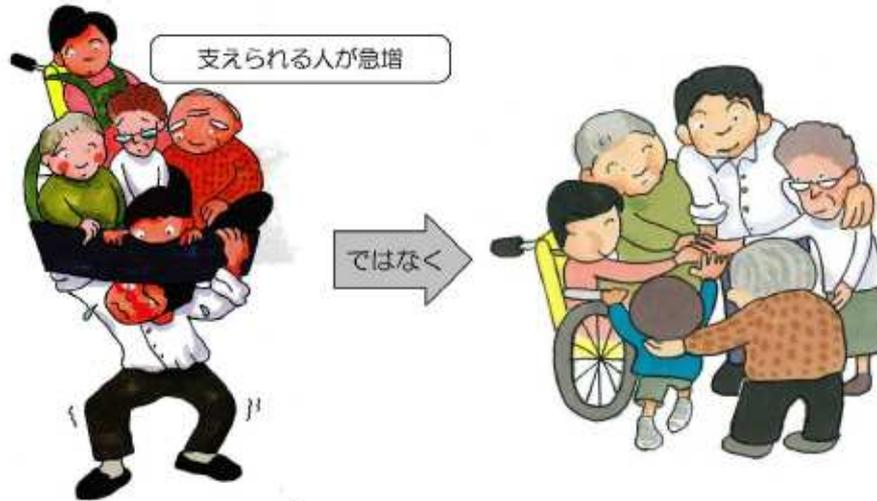


平成 20 年度 独立行政法人 福祉医療機構 助成金事業
「谷間の支援を障害者と地域の人でつくる事業」

イラスト：おーた けーこ

みんなで支え合う時代へ

●超少子高齢化社会



専門家や支援者だけでは、支えることができない
みんなでコミュニティをつくり、支えあう



共に生き、共に学ぶ

コミュニティづくりの視点

- 世代、障害の有無、文化の違いを越える。



コミュニティづくりは違いを認めることから始まる

- 支える側と支えられる側は時として入れ替わる。



高齢者が役割を持つ

障害者が役割を持つ

支えられる側と考えられている高齢者、障害者、生きづらさを抱えている人（経験した人）の体験や、そこから得た生き方は、時として人を支える

- 高齢者、障害者、問題を抱えた子どもが地域の人をつなく。



地域の問題や課題は新しいコミュニティをつくるチャンス



みんなで解決について語り合う中で、新しいコミュニティができる

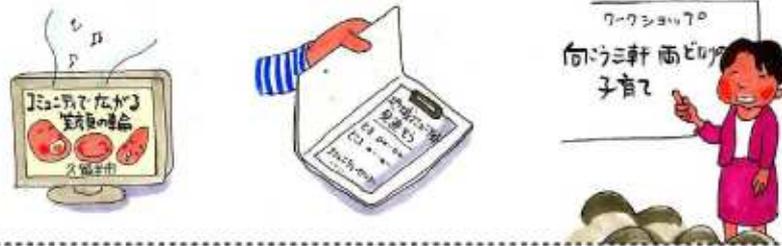
- 地域住民は力を持っている。



すぐ手の届く支え合いをつくるには近くに住む住民の力が必要

1 地域コミュニティづくりを意識する

- なぜコミュニティが必要なのかを大人・子ども一人ひとりが理解する。



次世代の地域の担い手である若者ほど地域コミュニティの必要性を感じていない。
⇒ 大掛かりなテコ入れが必要

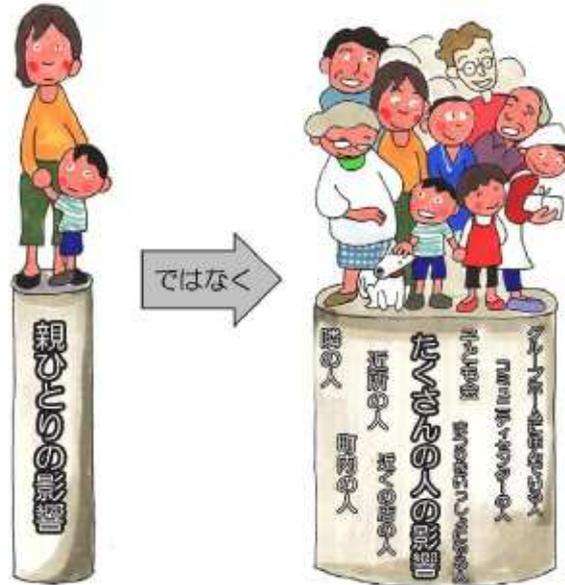
- エコと同様に雑誌、TVでの国民的な宣伝が必要
- 就学前の保護者向けの自立と共生のプログラムによる早期段階での啓発

- コミュニティづくりを大人・子ども一人ひとりが意識する。



2 子どもの育ちには地域が必要

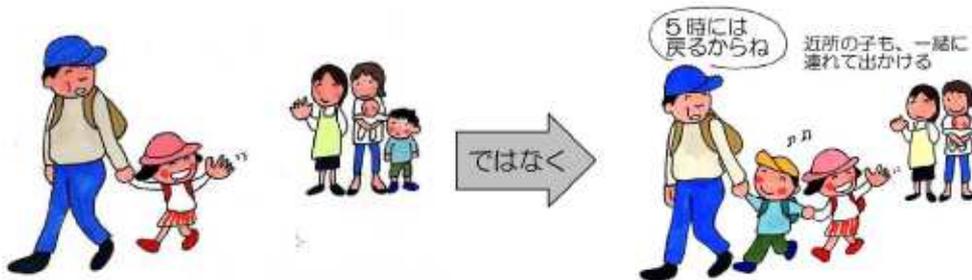
- 問題を解決する力をつけるには、色々な人の人生や考え方に触れる必要がある。



親だけではなく、地域ぐるみで子育てをする



親が積極的に関わる姿をみせる



自分の子どもだけではなく、他人の子どもも育てる①



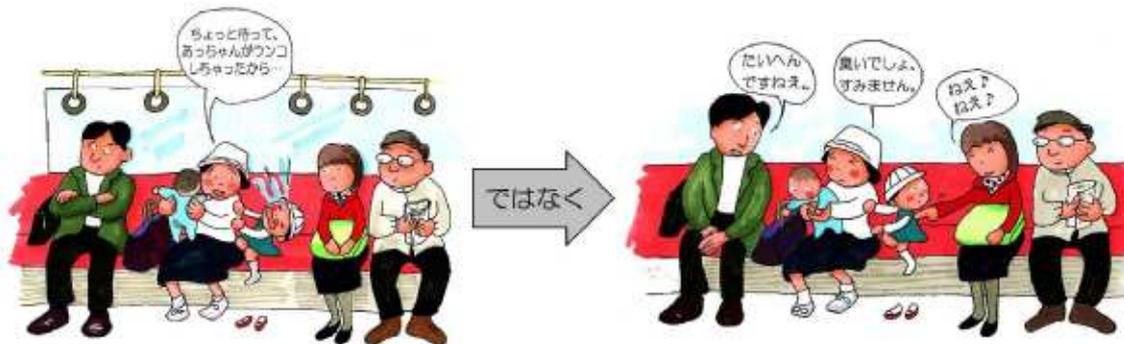
自分の子どもだけではなく、他人の子どもも育てる②

3 身近なところでの支えあいをつくる

- 働く場や暮らしの場といった身近なところで支えあいをつくる。



働く場や暮らしの場で支えあいをつくる



リスクやトラブルもあるからこそつながることができる



4 支援のノウハウを持っている人が自らの地域で活躍する

NPO 法人などノウハウを持って他の地域の住民と活動を共に活動し、支援の輪を広げる。



住民はちょっとしたノウハウをもらうことで積極的な関わりを持つようになる。

5 地域の拠点づくり

- 誰でも、世代、障害の有無、文化を問わず気軽に集え、助け合おうという気持ちを持つ場所をつくる。



- ・ もともと地域の人の溜り場であるところに、支えあいの機能を追加
- ・ 地域の人々が持つ支えあいの力を借りて、様々な人が共に生活していく

コミュニティビジネス



ボレボレの利用者と農家のおじさんが
いっしょに働く



- 施設のあり方



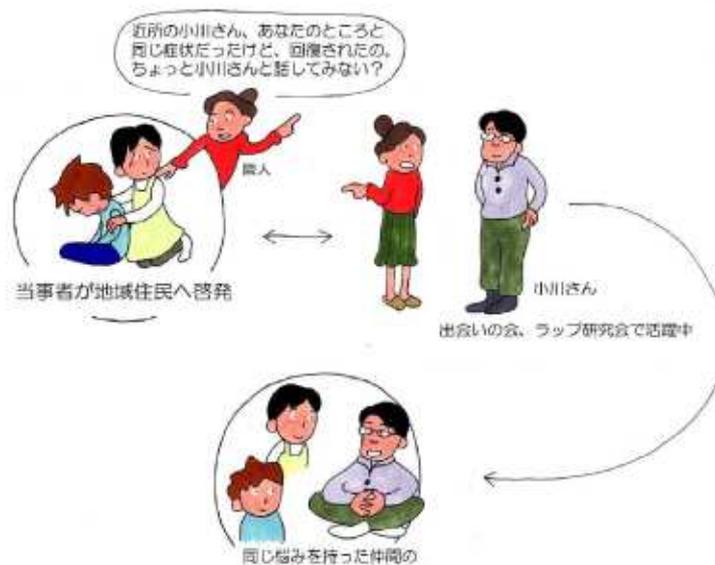
いろいろな悩みを持つ住民が集まり、支えあえる場を地域にたくさんつくる

6 安全・安心を自分たちでつくる

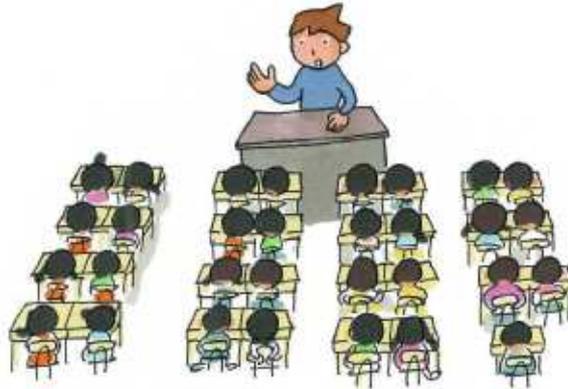
- 障害者、高齢者、生きづらさを抱えている人が生き生きできるような周りの人たちの関わり合いを育てる。(人権感覚、異文化を受け入れる力を養う)



- 地域にある問題を気づいてもらう。(当事者が地域で発信していく)



当事者が地域で生き生きと暮らしていることは、地域の人たちに希望を与えることができる。



当事者が体験を地域の人に話していく。

7 行政との地域の人の協働

- 行政と地域の人々が協働し、信頼関係をつくる。



行政が地域住民と共に知恵を出し合い、支えあい、信頼関係を築いていく。